
ポケモン不思議のダンジョン ー波紋の勇者ー

ループ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン ―波紋の勇者―

【Nコード】

N4678R

【作者名】

ループ

【あらすじ】

目覚めたらそこは、ポケモンの世界だった！？――

記憶をなくしてしまい、気がついたらリオルになった人間の少年コウと、夢を持つピカチュウのトリルが出会ったとき、新たな冒険の幕が開く。

そして、もう一人の元人間とトリルの親友が現れることで、物語は予想もしない展開へ加速していく。

プロローグ

ぼんやりとした光の中を、僕らは駆けていく。

「もう少しだ、もう少しでやり直せる世界に行けるぞ」

ああ、ついにこのときが来たんだ。

「お前は本当に良かったのか？あいつを置いてきて」

あいつ。

僕の親友。

構わないんだ、あいつもわかってくれた。

だから僕はここに居る。

「……まあいい。それより見えてきたぞ。あそこが…」

続きを言おうとしたが、何者かの攻撃に遮られる。

「ぐっ…なんだ？」

振り返るとそこには、黒いポケモン。

「ふふふ…そうはさせない…」

黒いポケモンが放った一撃は、僕らを引き裂いた。

「おい！手をつかめコウ！」

伸ばした手は届かなかった。

薄れゆく意識の中、僕は黒いポケモンを目に焼き付けようとした。

そして、全てが途絶えた。

プロローグ（後書き）

初めまして。

まだまだ文才のかけらもないと思いますが、どうぞよろしくお願ひします。

第1話：出会いは突然に

ねえ君、大丈夫？

ねえ、ねえってば。

うつすら戻る意識の中、聞こえたのは少年の声と波の音。

「うーん…？」

目を開けると、そこにいたのは：

「…ピカチュウ？」

「良かった、気がついたんだね。怪我はない？風邪引いてない？」

ピカチュウが笑顔を浮かべる。

「うん…って、ピカチュウ！？」

冷静に考えるとおかしい。

ピカチュウが話しかけているのだ。

「どーしたの？」

ピカチュウが不思議そうに彼を見つめる。

「だって、しゃべって…」

「当たり前じゃない？だって君はリオルだから会話できるに決まっ

てるでしょ？」

（君はリオルだから…）

（君はリオルだから…？）

がばりと起き上がり、海を覗き込む。

澄んだ青色の海に映るのは、紛れもなくリオルだった。

「嘘でしょ…？僕は…人間じゃ…」

「君…本当に大丈夫？」

ピカチュウが警戒した眼差しをする。

「それに…ここは…」

わからない。

この砂浜がどこなのか。

「もしかして君…僕を騙そうとしてる？」

そんなことはない、と首を横に振る。

「じゃあ、君の名前は？名前はなんていうの？」

思考を巡らす。

聞こえてきた言葉は…

『……コウ』

「僕はコウ。コウだよ」

「へえ…じゃあ大丈夫だね。僕はトリル。ピカチュウのトリルだよ」

第1話：出会いは突然に（後書き）

始まった物語。

心理描写は重点的に描いていきたいです。

第2話：宝物

「じゃあ、君は人間だったけど気がいたらここにいて、リオルになっっていたっていうの？」

トリルが驚く。

「うん：でも自分でもよくわからないんだ」

なぜここにいるのか。

その答えはどう頑張っても見つからない。

「それで、名前以外の記憶もないと：」

「うん：」

伏し目がちに答える。

このピカチュウは自分をどう思っているのだろうか。
コウは不安でたまらなかった。

「じゃあ君、僕の家においでよ」

「え？：」

「だって、君これからどうするの？」

今の衝撃にいっぱいいで、考えてもいなかった。

「でも…」

この人はそれでいいのだろうか？

「良いんだよ。それに君、悪い人には見えないんだ。なんだか、僕の親友を見てるみたいで…」

コウの気持ちを見透かしたかのように、トリルは言った。

「僕の親友もね、君みたいに突然現れたんだ。身勝手なやつだったけど、本当に良い奴だった」

このピカチュウはどこか感傷的だ。というのが、最初の印象だった。

「本当に良いの？」

「うん。おいでよ」

差し伸べられた手をにぎりかえた。

「ありがとう、ピカチュウ。なんていって良いかわからないけど…」

「トリルって呼んで良いよ…コウ？」

「…おう」

2人の笑顔が重なる。

コウにとっては目が覚めてから初の心が休まった瞬間だった。

「へ、ジャマするぜ！」

急にドガースが背後からトリルにぶつかる。

そのとき、トリルのカバンから何かのかけらが転がった。

「頂くぜ！」

また別のところからズバットが現れて、そのかけらを奪っていく。

その間、わずか数秒。

「あ！返せよ！」

トリルの体毛が毛羽立った。

「へ、弱虫トリルが言うようになったな」

「一人じゃ何もできないくせに！」

コウはまくしたてる2人を交互に見る。

「うう…」

さっきまでの頼もしい姿からうってかわったトリルを見て、コウは驚いた。

トリルってもしかして…
いじめられっこ？

「へ、大事な大事なかけらをいただいでくぜ」

「とりあえずドガ、海岸の洞窟に行こうぜ！弱虫トリルは来れないからな！」

ズバットが翼をいっそう羽ばたかせて言った。

「そうだなバット！ひゃひゃひゃひゃひゃ…」

2人は嵐のように去っていった。

「おいトリル、取り返さなくていいのか？」

しかしトリルは、

「うう…足が…」

震えていた。

「あいつらいつも僕をいじめていて…ついにあれまで取られちゃった…どうしよう？」

トリルはしょぼくれていた。

ああもう！じれったい！

コウはこういうタイプが苦手な人間だったようだ。

コウはトリルの手をつかむと、

「大事なものなら奪いに行くよ！」

「え、いや、ちょっと…」

「ちよつとも何もない！ 出発出発！」

こうして2人は海岸の洞窟に入っていた。

第2話：宝物（後書き）

とりあえず、コウは正義感強い活発な子で、トリルは勇気はあるけど弱い子って感じですよ。

トリルの親友についてはまたのちのちです。

第3話：奥底の戦い

海岸の洞窟の中には、野生のポケモンが生息しているが、温和なポケモンばかりで、よそ者が大声でわめいても気分を害しないようだった。

「ねえ！？コウ、戻ろうよ！？」

トリルがコウを追いかけてながら怯えた様子でわめく。

「良いじゃんか。目の前で泥棒されて黙って見てろって言うの？それより、これうめえな」

コウが青い木の実をかじりながら進む。

「それはオレンの実だよ。食べれば元気が出るんだ」

「へえ。良いものあるんだな」

コウは感心したようだった。

「それで、トリル。あいつらは何なんだ？」

あいつらとは、さっきのドガスとズバットのことである。

「ドガスの方はドガ、ズバットはバット。2人とも僕をいじめるんだ…」

「何でやり返さないんだ？あんな奴ら僕だったらとっちめてるぜ？」

「だけど…」

「だけどじゃねえ。トリルも男なら一度は男らしいところを見せてみなよ」

コウの言葉がトリルの胸に刺さる。

「ま、大丈夫さ。僕がついてるから負けることはないよ」

今度はコウが笑顔を向ける。

「う、うん」

トリルはなんだか戸惑っていた。

「お、あそこが洞窟の奥底だな」

光が射す方に向かうと、そこは洞窟の奥底。うつすらと太陽の光を反射して輝いていた。

しかしそこには2人の邪魔者がいた。

「へ、バット。あいつこんなものを大事にしてたのかよ」

「盗んで損したな」

2人を見つけるやいなや、コウはいきなり、

「体当たり！」

ドガースに体当たりを仕掛けた。

不意に攻撃を食らったドガースは岩に体をぶつけてしまった。

「痛っ…何するんだこの卑怯者！」

ドガースが怒鳴る。

「卑怯者？よく言うぜ。2人がかりでトリルの大切なものを取りやがって」

コウが呆れた顔で言う。

「大切なもの？こんなガラクタ返してやるよ！」

ズバットがかけらをコウの足元に投げつける。

コウはそれを拾ってトリルに渡した。

「トリル、お前の大切なものなら、もう離すなよ。…僕、あいつぶん殴ってくるから」

「え！？ちょっとコウ！」

笑顔で怖いことを言ったコウを見て、トリルは寒気を感じた。

「さあ、そのズバット。覚悟してもらおうかな？」

構えをせずにズバットに歩み寄る。

「な、近寄るなっ！」

ただならぬ気配を感じたズバットは、自分の発言を悔いていた。

「人の大切なものをガラクタ？へえ…」

動けないズバットの正面で立ち止まったコウが右手の拳を握りしめる。

「僕、君みたいな奴…大っ嫌いなんだ！」

言葉と同時に強烈な右ストレートを繰り出した。
気合いパンチである。

「ぐはあ…」

強力な気合いパンチを真っ正面から食らっては、タイプ相性の悪いズバットでも只では済まないようだった。

「さ、帰ろっかトリル。」

くるりと向き直って帰ろうとするコウ。

その顔はさっきと同じ笑顔だった。

「え、うん…」

コウの後を追うトリルの耳には、最後に小さいドガースの声が聞こえた。

「トリル…覚えてろ…兄貴に言ってやるからな…」

第3話：奥底の戦い（後書き）

作者は長文書くのが苦手です（・ω・）

一話一話は短いですが、長いお話を作るつもりですので、ゆっくりお待ちください m（　　） m

第4話…夕暮れ

洞窟を抜けると、外はすっかり夕暮れで西日が2人を照らしていた。

「わあ！綺麗だなあ！」

コウが夕日を見て、声を上げる。

「この砂浜は西日が射すから、晴れた日の夕方はいつもこうなんだ。僕は大好きなんだ！それに…」

空を見上げたトリルの目には、キラキラと光を反射する「泡」が映った。

「泡…？」

コウも泡に目をやる。

「そう！ここに住むクラブ達が出す泡なんだ！夕方になるとたまに群れで泡を出すんだ！ほら、もうこんなに…」

気がつくと周りはクラブの泡に包まれていた。

一つ一つの泡がランダムに夕日を浴び、その輝きを増幅させていた。

「本当に、綺麗…」

コウは砂浜に寝転んで空を見上げていた。トリルがその隣にそっと座り込む。

「今日は本当にラッキーな日だな」

いきなり記憶を失ったけど、自分を助けてくれた人がいて、その人に恩返しして、そしてこんなに綺麗な夕日を見ている。

「僕はコウに会えて嬉しいよ」

視線をトリルに向ける。

「だって、また友達ができたんだもの。それも強くて立派な」

「そんなに誉めるなよ…恥ずかしいじゃんか」

コウが顔を赤くする。

「僕ね、親友ができる前は一人で生きてて、だから僕はその親友、セリムに甘えてたんだと思う。だから、セリムが居なくなってから寂しくて、自分では何もできない弱虫になっちゃったんだ。一緒に居た頃は何でもやってたのに」

セリム。それがトリルの親友の名前である。

「甘えてばかりだったから、セリムも僕から居なくなったのかな…？」

少し悲しげだった。

「それはないと思うぜ。だってお前は強いじゃん。見ず知らずの僕に手を差し伸べてくれたトリルは、心が強いよ」

「そっか…ありがとう」

トリルは微笑んでいた。

「ねえコウ、コウは僕と一緒にいてくれる？」

「ああ、もちろんだよ。……ところで僕、お腹空いちゃった、トリルの家に行こうよ？」

「そうだね。もうすぐ夜だし、洞窟で拾った木の実もあるから、今日はオレンの実の料理を作るよ」

「へえ。料理作れるんだ…ちょっと意外」

「もう、失礼だなあ…じゃあ行こう。家まで案内するよ」

2人は立ち上がって、町に向かう。

そして、泡が割れて、日が沈む。

その日は安らかな夜だった。

第4話：夕暮れ（後書き）

相変わらず短さに定評があるかもしれない作者（・ω・；）

今回はなんとなくほのぼのさせました。

この短時間で二度も上げるってのもなかなか楽しいです。

では、また。

第5話：ようこそトレジャータウンへ！

日も暮れて、駆け足でトリルの家に向かったコウ達は、疲労のためかすぐに眠ってしまった。

わらをふんわりと盛った寝床は、すぐに睡魔を誘ったようだった。

次の日の朝のこと…

果物を切る音で、コウは目覚めた。

「うーん…」

コウの目の前には、オレンの実をすりつぶすトリルが居た。

「あ、コウおはよう！ぐっすり寝てたね」

そう言ってだいたい色の液体が入ったコップを差し出す。

「オレンの実のジュースだよ。生で食べるより甘味が増すんだよ」

グイと飲み干すと、爽やかな甘味が口に広がりさっきまでの眠気が吹き飛ぶ。

「…美味しい」

コウは素直に誉めていた。

「そう言ってくれるとありがたいよ。そうだ、コウ、今日はこの町

を案内するよ」

「うん、でもその前に…」

ぐうっとお腹が鳴る。

「そうだね。ちょうど今日はリンゴがあるから食べよう？」

「おうっ」

朝食を食べた後、2人はトレジャータウンへと向かった。



トレジャータウンは、この地方では最も大きい集落らしく、多数の施設が建ち並んでいる。

「あそこがヨマワルさんの銀行。顔は怖いけど優しい人なんだ。奥にあるのがエレキブルさんの連結屋。最近は一族の会議があるって言ってお店を休んでるんだ。」

「へー、にぎやかだな」

トレジャータウン東地区を歩いている2人。

コウはトリルの説明を聞きながらキョロキョロしている。

「川を渡ると西地区。ここには双子のカクレオンさんが商店を開いていて、毎日忙しそうなんだ。その隣にはガルーラお婆さんの蔵。トレジャータウンを拠点にするたぐさんの探検家や救助隊員が、ガルーラお婆さんに荷物を預けてるんだよ」

「探検家って何だ？」

コウが尋ねたら、振り返るトリルの目が輝いている。

「探検家って言うのはね、僕が憧れてる仕事なんだ！未開の地や古い遺跡、怖い野生ポケモンが居る洞窟を探検してお宝を取ってくるんだよ！かっこいいよね！」

トリルが早口で語る。

「おお、面白そう！僕もやってみたいな！」

コウはわくわくしていた。

洞窟の奥まで行き、見つけた宝箱を開けて財宝を手に入れる自分の姿を想像すると、コウは早く探検家になりたくてうずうずしてしまう。

「じゃあ、今から北地区に行こう！そこに行けば探検家になれるんだよ！」

2人は急ぎ足で北地区へ向かった。

第5話：ようこそトレジャータウンへ！（後書き）

地震で色々大変でした。

こんな小説を見てくださってる皆さんの無事を祈ります。

第6話：ギルドへ

北地区にはこの地方唯一の探検家のギルド、「プクリンのギルド」があり、プクリンのギルドは高台の上に建っている。

そして、ギルドへと続く長い階段を上る二匹のポケモンが居た。

「はあはあ…ちょっと…休憩しようよ…」

「何言ってるの、もうすぐだよ」

4つ足で階段を上るトリルには、この長い階段は辛いようだが、二足歩行のコウも息を乱さずには居られなかった。

「ほら、頂上だよトリル！」

一足先に頂上に着いたコウが、振り返ってトリルに呼びかける。

「はあはあ…着いた…」

最後の一段を踏みしめ、トリルは倒れこんだ。

「ねえトリル、凄いよこれ」

うん、と顔を上げるとそこには、

「プクリンの顔…だね…」

プクリンの顔をかたどった形のドームがあり、周りにはポケモンの

トータムポールが立っていて、ドームの入り口の前には木製の格子が張られていた。

まさしくこれは、

「悪趣味だな…」

としか言いようがなかった。

「その格子はこのギルドの防犯装置なんだよ」

「防犯装置？」

やっぱり悪趣味である。と、コウは呆れていた。

「こうやって、上に乗ると…」

格子を敷いた穴の奥底から、声が聞こえる。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足形？誰の足形？」

「足形はピカチュウ！足形はピカチュウ！」

トリルが格子を降りてコウの方を見る。

「さ、コウも早く」

こそばゆそうだな、とコウがためらっていると、

「そのもう一匹！早く乗れ！」

穴の中から怒鳴られてしまった。

コウが渋々格子の上に乗る。

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「誰の足形？誰の足形？」

「足形は…足形は…」

穴から聞こえる声が止まる。

「おーいどうした、見張り番？早くしろ」

「足形は…たぶんリオル！」

「たぶんって何だよ…」

「だってあまり見かけないから…」

「ねえ、もう良い？」

穴の中で口論する二人に苛立ったコウが話に割り込む。

「ああ、もう良いぞ。入り口を開けるから早く入れ。」

ゴゴツと音を立てて、入り口が開いた。

「じゃ、入ろうか」

「そうだね」

二匹はゆっくりと中に入った。

中に入るとそこには更にハシゴがあり、二匹は慎重に降りていった。
ハシゴを降りるとそこにはたくさんのポケモンが居た。

「わあ！凄いいね！」

トリルがきよろきよろと周りを見回す。

「ねえ君達、新入りですよ？何しに来たんですか？」

一匹のチリーンがトリルに話しかけた。

「はい？あ、探検家になりたくて来ました」

「え、じゃあギルドに加入希望ですか？…じゃあ下に行くハシゴを降りていてください」

そう言って別のハシゴを指した。

「ありがとうございます。じゃ、行こうよコウ？」

「あ、うん」

周りをぼうっと眺めていたコウは一歩遅れてトリルについて行った。

第7話：探検隊結成！

2つ目のはしごを下りていくと、そこには数匹のポケモンが居た。

その中の1匹、ペラップがはしごを下りた二人に近づいて来た。

「ん？なんだお前達？勧誘ならお断りだぞ」

コウ達からしたら、だいぶ的外れな言葉だった。

「違います、僕達探検家になりたいくて来ました」

「ええ！？探検家になりたいだって～～！？」

トリルの答えに対し、ペラップは予想外に驚いてるようだった。

（うーん…まさか探検家になりたいだなんて…見たところ、修行に耐えれそうには見えないが…）

「ねえ、どうかしたの？」

コウは何やら色々な思惑を察したようだった。

「いや、なんでもない！いや～探検家になりたいなんて大歓迎！修行はとても楽ちん！さっそく探検家登録をしよう。ついておいで♪」

そうまくし立てて、ペラップは2人を奥へ案内した。

ついて行く途中、コウには窓から外の風景が見えた。はしごを二回

下りたとはいえ、まだ相当な高さであった。

（ふーん。何か変なの）

コウはますますこのギルドの親方、プクリンの趣味が分からないようだった。

「さあ、ここだよ♪親方に失礼がないようにね！」

木製の扉を開けると、そこは色々な物が転がっている丸い部屋であった。

「親方様、新しいギルド入門希望者が来ました」

部屋の真ん中で、背を向けていたプクリンに話しかける。

「……………」

「親方様？」

間があってから、プクリンが振り返った。

「やあ♪僕はこのギルドの親方のプクリンだよ。探検家登録希望だよ、なんなら君達で探検隊結成しなよ♪」

「探検隊？」

首をかしげるトリルを見て、ペラップが説明する。

「最近、単独行動をする探検家を襲う事件が多発していて、探検家

協会が探検隊の結成を促進してるんだよ」

「へえ：じゃあコウ、僕らで探検隊を組もうよ！」

「そうだね。じゃあ僕達、探検隊を組みます」

「じゃあこれ、探検家セット2人分♪」

目の前に差し出されたのは、2つの袋とバッジ、そしてリボンが1つ入っていた。

「その袋は探検袋、探検家の必需品で不思議な袋だよ。バッジは探検隊バッジって言って、探検したダンジョンから脱出できるパワーを持つてるよ。最後にリボンなんだけど、それは紺色リボン。身につけるものなんだけど、今切らして一つしかなかったんだ。ごめんね」

色んな表情でプクリンが説明した。

「ありがとうございます！このリボン、コウがつけなよ。きっと似合うよ？」

ちょっと恥ずかしそうに、コウはリボンを預かった。

「じゃあ君達、探検隊の名前は何にする？」

「え、名前も決めるの？」

トリルの尻尾がピクツとなった。

「当たり前だよ♪探検家一人なら個人の名前で大丈夫だけど、探検隊はチームだもん。名前がなきゃね♪」

プクリンがリングゴを頭に乗せながら言う。

「どうしようか、コウ？」

「うーん…チームの名前か…」

名前…

名前は…

ふと、誰かの声が聞こえる。

（俺とコウでチームを作ろうぜ！名前は…）

誰の声だろうか、コウには分からない。

（名前は、アンバー。遠い国の言葉で琥珀って意味だ。俺とコウの友情は琥珀のようにいつまでも色あせないようにって…）

声が止む。

「…名前はアンバー。遠い国の言葉で琥珀って意味なんだ」

「スッゴク良い名前だね。じゃあチーム名はアンバーでお願いします」

「オッケー。じゃあ今から登録するね♪うううう…たあっ！」

プクリンがハイパーボイスを放った。が、ダメージがない程度であ

った。

「これで今日から君達は、探検隊アンバーだよ！ギルドに君達の部屋を用意したから、明日からここでみんなと生活だよ♪」

「よろしくお願いします！」



こうして、コウとトリルのギルドでの生活が始まりました。

しかしそれは、長い物語の始まりに過ぎないことは、誰にも知る由がありません。

第7話：探検隊結成！（後書き）

やっと探検隊を結成しました（一・一；）

ここまでダラダラやって来ましたが、これからが物語の始まりです。

この小説を読んでくださってる皆さんには、感謝の気持ちでいっぱいですm（　　）m

第8話：ギルドでの生活

プクリンの部屋で探検隊を結成した後、コウ達はペラップに連れられて、ギルドの広間に向かった。

広間では、色々なポケモンがそれぞれ作業を行っていた。

「みんな、作業をやめて集合！新しい入門者を紹介するよ♪」

ペラップが予想外の大声をあげたので、コウ達はドキッとしていた。そのうち、そろそろとポケモン達が集まって来た。

「新しいギルドの入門者を紹介するよ♪右のピカチュウがトリル、左のリオルがコウ。みんな仲良くしてあげるんだよ♪」

パチパチと拍手が鳴る。

拍手の後、続々てギルドのメンバーが自己紹介する。

キマワリ、ドゴーム、ヘイガニ、ディグダ、ダグドリオ、グレッグル、ビツパ、そして上の階で作業しているチリーンとリーダー格のペラップ。

この9人が、コウ達の先輩なわけである。

「さ♪作業を再開しな！お前達についておいで」

次に案内されたのは、入門者達の部屋で、それぞれ2～3人が一つの部屋で生活しているようだ。

「さあ、お前達の部屋はここだよ♪しばらく使ってなかったから、ちよっとほこりっぽいな。とりあえず、最初の仕事は部屋の掃除だ。終わったら今日はギルドの中で自由にしててかまわないよ♪じゃあ、私は仕事があるからここで…」

ペラップは帰ってしまった。

「ふう。ずいぶんおしゃべりだね」

「そうだな。僕はあまりああいいうのも好きじゃないかも」

そつと窓のカーテンを開けると、小さな森が見えた。その向こうには更に山脈が広がっている。

「じゃあ、探検隊メンバーの最初の仕事をやろっか」

笑顔のトリルは、ほうきを見つけたようだった。

「そうだな」

コウも笑顔になる。

掃除は夕方まで続き、ちょうど終わる頃に夕食の時間になった。

「皆さ〜ん！夕食の時間ですよ！」

チリーンが自らの体を震わして、音を鳴らす。

その声に応じて、コウ達を含めたギルドのポケモンが、広間の奥に

ある食堂に集まった。

「「いったきまゝす!!」」

ギルドの食事は、リング1つとオレンの実かモモンの実を選ぶものだった。

「「ごちそうさまー!!」」

夕食を食べた後は、ギルドのポケモン達は基本的に自由である。

コウ達は自分の部屋に戻った。

「今日は色々あったね。ギルドに来て、探検隊を結成して、今はギルドに入門しちゃってる」

「うん。僕もびっくりだよ」

ぼんやりと月明かりが部屋に射している中、2人は寢床に座りこんで話す。

「これもみんな、コウのおかげだよ」

そうかな?と照れくさそうに返すコウは、少し眠たそうだった。

「ふふふ、じゃあもう寝よっか。お休み、コウ」

「お休み、トリル」

こうして、探検隊アンバーの最初の日は幕を閉じた。



静かな朝。

コウ達はうつすらと朝日が射す中、すやすや寝ていた。
そこに現れたのは、ある種の悪魔であった。

「起きろおおお！！朝だぞおおお！！！」

耳をつんざく轟音が2人を眠りから引きずり出す。

「う…な、何…？」

「耳が…」

2人がなんだか分からないまま目を覚ますと、そこに居たのはドゴームであった。

「新入り達！早く起きろ！朝礼が始まるぞ！」

「は、はい…ほら、コウも起きて…」

コウとしては、まだ寝てたかったし、こんな奴に起こされるのが気に入らないようだったが、ここはギルドである。言うことは聞かなくては。

ムスツとした顔で起き、フワツとあくびをしてから立ち上がった。

「起きたようだな。ほら、早く来い」

ドゴームの少し後をとことこと歩いてついでいくと、広間でみんなが集まっていた。

「お前達、危うく遅刻だったぞ！気をつけるんだよ」

ペラップの小言を聞き流して、コウは背伸びをする。

するとそこにプクリンが現れた。

「親方様、おはようございます♪」

「……………」

返事はなかった。

「親方様…？」

（親方様、相変わらずですね…）

（目を開けたまま寝てるなんて…）

（肝が座ってるぜ…）

弟子達の心を読んだかのように、ペラップはプクリンを呼び起こすように話しかける。

「親方様！親方様！」

「……は、さあみんな、今日も元気に朝礼だよー♪」

「一つ、仕事はサボらない！二つ、逃げたらお仕置き！三つ、今日も明るく元気なギルド！」

朝礼は三箇条であった。

「じゃあみんな、今日も元気に頑張ろ〜」

「おー！！」

かくして、各自が散らばりそれぞれの仕事を始めるのであった。

コウ達は何をするか分からず、突っ立っていた。

「おい、お前達はこっちに来い♪」

ペラップが羽を飛ばたかせてコウ達を呼ぶ。

「さっそくで悪いんだが、お前達に仕事を与えよう。」

「仕事って何ですか？」

「うーん、それが…親方様からの直々の仕事だから私は従うしかないんだが…」

「何なんですか？」

「…このギルドの東にある『小さな森』に行って、オボンの実を取ってくるって仕事なんだ」

「ええ！？じゃあ、さっそく探検ですか！？」

トリルは驚きのあまり声をあげてしまう。
それほどまでに、新人にはいきなりのものであったからである。

「静かに！私も親方様の意向はわからんが、仕方がない。お前達、ちゃんと準備をしてから森に行くんだよ」

トリルは嬉しさのあまり涙ぐんでいた。

「はい！頑張ります！行こう、コウ！」

トリルはコウの手をつかんで、珍しく二足歩行でギルドのはしごへ向かった。

（小さな森か：それでもトリルにとっては、初めての知らない場所への探検。嬉しそうだな：僕も頑張らなきゃ）

そう思うコウも内心ワクワクしていた。

第9話…小さな森

トレジャータウン東口から歩いて約一時間、そこに小さな森はある。

小さな森には木の実のなる木があり、トレジャータウンのポケモン達の多くはこの森から食料を調達している。

「だけどさ、なんでその森の木の実は無くならないんだ？」

「それはね、小さな森は不思議のダンジョンだからなんだ」

「不思議のダンジョン？」

森に向かう草原を渡りながら、2人は話す。

「ずっと昔に、黒いポケモンがこの地方に現れてポケモン達を悪夢におとし入れたんだ。そのとき、黒いポケモンの放った『波紋』が世界の時空を変えたんだって」

「波紋？」

何やら胸に引っかかる言葉であった。

「うん。よくは分かってないけど、とにかく『波紋』っていうものがあってそれが原因みたいなんだ。それで、不思議のダンジョンっていうのはその土地に入るたびに土地の形が変わるものなんだ」

「それじゃ、地図も作れないな」

「うん。それに、ダンジョンに入ると気が付いたら昼間だったり、
天気が変わったりして近づくのも危険らしいんだ」

「タウンの近くの海岸の洞窟も不思議のダンジョンだったのか？」

「さすがコウ、その通りだよ。不思議のダンジョンにも程度があつて、あそこはまだ小さい方なんだ」

まだまだ分からないことが多いな、とコウは感心していた。

そうしているうちに、2人は小さな森に着いた。

「ここだな」

「うん。じゃあ探検隊アンバー、頑張ってこう」

2人同時に足を踏み入れたその瞬間、一瞬ザワツとした感覚がした。

「今のが…」

「うん…不思議のダンジョンに入ったみたいだね」

森の中は外とは打って変わって涼しく、静かであり、よく見るとちらほらと野生のポケモンもいるようだった。

「オボンの実がなる木はどこにあるの？」

トリルが探検袋の中から依頼書を取り出す。
依頼書には、

『依頼者プクリン、目的地小さな森北部、依頼内容オボンの実を3つ入手、依頼ランクD』

と書かれていた。

「北部にあるみたいだね。ダンジョンの中の方位は変わらないし、生える木も大して変わらないみたいだよ」

一緒に添付されていたペラップのメモには更に詳しいダンジョンの特徴が書かれていた。

「じゃあ、行ってみよっか」

「そうだね」



森を歩く中で、コウ達は時々森に住むポケモンに襲われもしたが、そのつど技を使って倒して行き、乗り越えていった。

しばらくして、オボンの実がなる木が生える一帯に到達した。

「ここにオボンの木があるけど、どれも熟してないな」

「うーん…もう少し探してみようよ」

トリルは辺りをキョロキョロしている。

すると、

「ねえ、あれってもしかしたら…」

指差す先にあったのは、ひととき大きなオボンの木。もちろん熟したオボンの実がたくさん実っていた。

「オボンの木だね」

「やっと見つかったな。じゃあ3つもぎって帰ろう」

コウが木の実を採ろうと木に近づくと、

「おい、お前何者だ？」

木の枝に何者かが居た。

「誰だ？」

殺気を感じたコウが一步退いて構えをとる。

「ふん。いきなり現れて誰だとは…礼儀がなってないな」

ガサツと音を立ててそのポケモンが木から飛び降りる。

「俺はここらを縄張りにしているカモネギだ。この木のオボンの実が欲しいみたいだが、残念だがここは俺の縄張り。あげる訳にはいかないな」

背中にしまったネギのような棒を取り出して構える。

「じゃあ、悪いけど力づくでいただいてくよ…トリル、行くよ」

「え、うん…」

呆然と眺めていたトリルがコウの右後ろに来了。

先に動いたのは、コウであった。

コウは素早い動きでカモネギに体当たりを当てる。

もろにくらったカモネギは、少しよろけるも体勢を立て直し、棒でコウの右膝を叩く。

「うっ…トリル！」

すかさずトリルが電気ショックを繰り出す。

電気ショックはカモネギの右翼に当たり、電撃はわずかに苦痛を与える。

「何を！居合い切り！」

カモネギが、棒を逆手に持ちコウに斬りかかる。

「く…なかなかやるな」

「コウ、しっかり！叩きつける！」

トリルがコウにオレンの実を渡すと同時に、カモネギに叩きつけるを繰り出す。

「ふん、その程度か。ならばきりさく！」

今度は順手に持ち、思い切りトリルに斬りつけた。

が、

「少し遅かったよ。これでおしまいだよ、カモネギ」

空中に飛び上がり気合いパンチの構えをとるコウが居て、カモネギは目をトリルからそらした。

「そんな大きいモーションの技なんて…」

回避が簡単、と続けたかったカモネギだったがダメであった。

「残念。電磁波だよ」

目を離れたすきに、トリルが尻尾から電磁波をカモネギに流していて、それにより、カモネギの体は動けなかったのである。

「くそ、無念だ…」

タイプの相性のうえ、落下による加速で更に勢いを増した気合いパンチは、見事にカモネギに命中し、同時にカモネギは気を失った。

「やったね、トリル」

周囲に気合いパンチによる土煙があがる中、コウはトリルに笑顔を向けた。

「うん。さすがコウの気合いパンチだね。そうだ、これカモネギに渡しておこうよ」

差し出したのは、オレンの実。

「いくら任務でも可哀相じゃない？ ちょっとカモネギに悪い気がする…」

トリルの思いがけない優しさにコウは驚いていたが、意見には賛成である。

「じゃあ、僕からはモモンの実を」

カモネギのもとにそっと木の実を置き、その後コウはオボンの木に手をかけ、3つ木の実を採った。

「これで任務達成だね」

「うん、長いようで短い任務だったね。ところで、探検隊バッジを使えばすぐ帰れるけど、どうする？」

袋にオボンの実を入れながら、トリルに聞く。

「今日はもうちょっとこの森を見ていこうよ。もしかしたら、お宝が見つかったりして」

「そうだな。じゃあ、早く行こっか」

予想通りの返事にコウは少し喜んでいるようだった。

2人は結局、夕方になるまで探検を続けてから帰ったのであった。

第9話：小さな森（後書き）

最近ハードスケジュールで更新してる気が…

何はともあれ、探検隊アンバーの任務は無事に終了しました。

次回は再びギルドでの生活が舞台です（・ω・）

第10話：月夜の話

見事にオボンの実を持ち帰ったコウ達は、早速プクリンに木の実を渡しに行った。

「わあ♪ありがとう♪僕の為に採ってきてくれたんだね♪」

上機嫌で、オボンの実でお手玉をする。

「親方様、珍しいですね。いつもはセカイイチなのに」

ペラップが部屋の整理をしながら言った。

「セカイイチってあの世界樹になる珍しい木の実ですよね？」

「世界樹？」

コウが首をかしげる。

「この地方の南西の果て、遠瀬の島にある木なんだ。最も、その島自体が世界樹なんだけどね」

「そんなに大きいのか！」

「うん。伝説によると、数百年前に緑のポケモンが種を植えたんだって」

なぜだかトリルが自慢気だった。

「今ではペリッパの商隊が年に数回、島を訪れてセカイイチを採るんだよ。おかげでなかなか高価で…」

ペラップは目を伏せる。

（ギルドの経営も、難しいところなんだろうな…）

コウはペラップの様子から自己完結した。

「さ、お前達もこんな時間だから早く自分の部屋に戻りな」

思いだしたかのようなペラップであったが、コウ達は素直に部屋に戻っていった。



「今日は新月だね」

窓から差すだろう月光は今夜は無く、部屋に用意されているロウソクの淡い光だけが部屋を照らしていた。

「昔、お母さんが言ってたんだ。新月の夜はね、悪いポケモンの生まれる時間だから、良い子は寝ましようねって」

毛繕いをしながらトリルの思い出話が始まる。

「お母さんは色んな昔話を知っていて、僕が寝るときによく話をしてくれたんだ。さっきの世界樹の伝説もお母さんが話してくれたものなんだ」

「お母さん、物知りなんだな」

「うん。それに、これもお母さんがくれたものなんだよ」

探検袋から、何かのかけらを出す。

「これは、あの時の…」

トリルと初めて会ったあの場所での出来事を思い出す。

「これは、遺跡のかけら。お母さんがある日くれたものなんだ。いつかきつと、僕がこのかけらの謎を解くようにって」

懐かしい眼差しでかけらに触る。

「お母さんにも謎が解けなかったんだ…そんな謎、僕に解けるかな？」

コウはぐつと拳を握る。

「あの時さ、僕言ったでしょ？」

海岸の洞窟に入ったとき。

「僕が居るから大丈夫だって。それに、僕達は今探検隊を結成したんだよ？ いつかギルドを卒業したら、いっしょに謎を解く旅に出ようよ」

寝転がって握った拳を前に出す。

「うん…そうだね、ありがとう」

トリルも寝転がる。

「今日はもう寝よっか。お休みコウ」

「お休み…トリル」

2人が目をつぶってからしばらくして、ロウソクの光はフツと消えた。



どこかの森。

一匹のグラエナが逃げるように走っていた。

「はあはあ…何なんだあいつ…」

ふと立ち止まり、振り返る。

周りには誰もいなかった。

「ふう、もう大丈夫かな…」

一息ついて、思い出すのはさっきの出来事。

(あの黒いポケモン…何だってあんな所に…あそこは…)

「そういえば今日は、新月か」

空を見上げても月明かりはなく、どこか心細い。

「こういう話を聞いたことはないか？」

低く重い声が聞こえる。

「どこにいる！？」

グラエナが辺りを見回すが、誰もいない。

「新月の次の夜は月の神様が力を失うらしいな」

「お前、どこでそれを！？」

グラエナが吠えるような声を上げる。

「いや、それだけでない。…ほこれらの悪夢が目覚めるんだろう？」

グラエナの背後に、黒いポケモンが音もなく現れ、波導弾を放つ。

「うっ…」

グラエナは気を失ってしまった。

「いよいよ明日…忘れられた伝説を知る者などほぼ居ない…あいつですらここは分からないだろう」

黒いポケモンの手には月のような宝石があり、妖しい光をたたえていた。

「悪夢の日はもうすぐだ」

黒いポケモンはニヤリと笑った。



「え、またでゲスか？」

「はい。今度は暗夜の森の近くで見つかったらしいです」

ビッパとチリーンが話しているところに、コウ達が通りかかった。

「何かあったんですか？」

「あ、コウさん達。実はまた探検家が何者かに襲われてたんです。それがまた厄介な人で…」

少しチリーンが口ごもる。

「厄介な人？」

「はい、実は襲われたのは暗夜の森の警備をするポケモンだったんです」

「暗夜の森って、あの月の社があるところですよね？」

「月の社？」

コウにはさっぱり意味が分からない。

「この地方に伝わる伝説で、月の神様の話があるんだ。その中に月の神様が悪いポケモンを懲らしめて封印したんだって。その封印した場所が月の社。今では月の神様をまつる場所なんだよ」

トリルの説明が入った。

「それで、なんで厄介なんだ？」

「月の社の規則として、新月の次の日は決められたポケモンが月の社を含めた暗夜の森を閉鎖するんでゲス」

コウの疑問にビッパが答えてやっとコウは納得した。

「じゃあ閉鎖する人が居なくなったんだな」

「はい。でも、今回の場合それだけじゃなかったみたいなんです」

チリーンが不安げな顔をする。

「どうやら、襲ったポケモンが伝説に出てくる悪いポケモンに似てたみたいなんです」

「え、でも悪いポケモンは封印されてるんだろ？」

「はい…そのはずなんですが…」

今までに例の無い事態らしく、情報があまり公開されていないみたいであった。



その後、コウ達はチリーン達と別れ、トレジャータウンの東地区、ヨマワル銀行の前に居た。

「なあ、トリルは暗夜の森の場所を知ってるか？」

「うん。南にずっと行ったところにあるんだよ…ってまさか行くつもり？」

トリルが驚いた様子でコウを見る。

「うん。色々気になってさ…行ってみないか？」

「い、良いけど今日の仕事はどうするの？」

「夕方までに帰ってくればあれくらいできるだろう？そうと決まれば出発出発！」

コウは再びトリルの手をひいて走っていった。

目指すは暗夜の森。

これから全てが始まる場所なのである。

第10話：月夜の話（後書き）

いよいよ物語は本番（一・一；）

実は作者も書いてて意味が理解しきれないくらい新しいワードと伏線を展開しましたorz

次回から（すでに）話が大きくズレます。

というかずっと後まで原作の話は混ぜるつもりはありません（・|・；）

ところで、皆さんに質問なんですけど、うちの主人公2人を後書きなんかに出演させてもよろしいでしょうか？

先輩方の小説を読んだと、そういう形式が多いので…

何はともあれ、これからもよろしくお願いしますm（| |）m

第11話：暗夜の森で

2人がトレジャータウンを発ってから約二時間後、昼過ぎになってから暗夜の森にたどり着いた。

「ここが暗夜の森だね」

「まるで樹海だな」

目の前に広がる森は、木の密度の高さもあってか薄暗い雰囲気を持っていて、来る者を拒むような空気を放っていた。

「よし。行こう」

「月の社は暗夜の森のちょうど中心、ここから南に行けば大丈夫みたいだね」

2人は森に入ってしまった。



森に入った途端、空は暗くなり、空気は冷たくよどんだようになった。

「本当に薄暗いな。暗夜の森というだけあるよ」

「いや、変だよ。本当は木ごとに灯りがついていて、道に迷わないようにしてるはずなんだ…」

何か異変が起きている。

そう確信したコウは一層気を引き締めた。

「ねえ、あそこに誰か居るよ?」

トリルの視線の先には、薄暗い森の中で不思議に光る白い体毛のポケモンが居て明らかに場違いであった。

「行ってみよう」

コウ達が歩み寄ると、白いポケモンはこちらに気づいたようで、とっさに身構えていた。

「ねえ!?! 僕達は悪いポケモンじゃないよ? 君はなんでここに居るの?」

「探検隊か…ふん。」

ギラリと赤い目が見えた。

「早くここから立ち去るんだ。もうすぐここは災厄に襲われる。…最も、今となっては手遅れだが」

「どういうことだ?」

コウが白いポケモンに問う。

「忘れられた伝説。人の知る伝説の裏に隠された真実。奴はそれを再現しようとしている」

「奴？ 奴って誰だ？」

「悪夢の化身……」

そう言って白いポケモンは立ち去って行った。

「おい、待ってよ！」

すぐに追いかけるも、既に居なかった。

「あのポケモン、僕たちに忠告してたよね？」

「うん……でも」

腑に落ちないのだ。

いつもと違うらしい森の様子。

いきなり現れて、意味深な忠告をした白いポケモン。
そして、森に入ったときから見える、謎の「波」。

（辺りを見渡すと見える紺色の波。寄せては返し、時にトリルや森の木々に、自分にも染みて消えていく。トリルはどうだろう？ その波が染みる度、なぜか不安な気持ちになる）

立て続けの不思議な現象で、コウは気持ちの整理がつかないようだった。

「行こうよ、コウ」

「えっ？」

「きっとこの先で何か大変なことが起きようとしているんでしょ？
なら僕らは、探検隊の仕事として、月の社で何が起こるか見なきゃ
ね」

トリルがニコツと笑ったその瞬間、辺りは小さいけれど淡い白の「
波」が広がり、コウにも波が染みていった。

すると、なぜだかコウは気持ちちが落ち着いてきた。

「ありがとうトリル。じゃあ行こう。ここまで来たなら見ないで帰
るのもシyakだ。あのポケモンには悪いけど行かなきゃね」

自分の袋からクラボの実を出し、一口で食べる。

「うん！それでこそコウだね」

トリルが再び笑うが、もう「波」は見えなかった。



しばらく進む中で、やはり暗夜の森に住む野生のポケモンが襲いか
かって来たが、2人のコンビネーションの前ではあまり歯が立たな
かった。

「にしても、こう雰囲気暗いと出てくるのもゴーストタイプが多
いな」

格闘タイプのリオルであるコウは、得意技の気合いパンチが効かな

いため、さっきから噛みつくばかりを繰り返していた。

「コウは、相手を殴るのが得意だね」

トリルがちゃかした。

「そんな言い方しないでよ…気合いパンチだって楽じゃないよ!」

現れたゴースに噛みつくを繰り返し、一撃で打ち倒した。

「噛みつくのも大変そうだね」

「さあ、早く行こう。もうすぐ月の社でしょ?」

フフツと笑ってコウはトリルを急かした。

そうこうする間に2人は唐突に月の社に着いた。

「いきなり現れたね」

「というか、広いな…」

月の社は、広さがトレジャータウンの約半分で、敷地の中には祭壇や、井戸などがあり、他には恐らく月の社を警備するポケモン用であろう、小さな建物もある。

「とりあえず、あの建物に入ってみよう」

できるだけ足音を立てないように、2人は建物に近づいていく。

木でできた建物のドアをゆっくりと開けると、きいっと音を立てた。

「こんにちは…誰か居ますか？」

真っ暗な建物の中は、目を凝らしてみるも、誰も居ないようであった。

「誰も居ないみたいだな？」

トリルが先に部屋に一步踏み入れたそのとき、

「ここは警備者の小屋…そなたらが警備者か？」

暗がりから、フッとヨマワルが現れた。

「うわあ!？」

トリルが思わず声をあげる。

「あなたは誰ですか？」

「いきなり入ってきておいて誰ですか？とは…礼儀がなっとらんな。まあ良い、わしはヨマワル。この月の社の管理人じゃ」

小屋の中に明かりが灯り、ヨマワルの姿が見えた。

「僕はコウです。こっちがトリル。僕は探検隊で、月の社を見にきました」

コウが一步部屋に入って説明した。

「観光か：今来るとはまたずいぶんと馬鹿だな」

「何がですか？」

馬鹿と言われて少しカチンときたコウであったが、そこを抑えてつとめて冷静に返した。

「もうここは：いや、この地方は終わりじゃ」

ヨマワルが絶望した声をあげる。

「さっきからみんな同じこと：この月の社で何が起こるんですか？」

トリルは動揺を隠せないようだ。

「悪夢の日が始まる：わしに止める権利はない：それは社の管理人の運命なんじゃ」

「悪夢の日？」

「悪いことは言わん。祭壇には決して行ってはならぬ。あそこに居ては魂すらついでる。それだけは避けるのじゃ」

それっきり、ヨマワルは居なくなってしまった。

「……………」

沈黙が流れる。

そのとき、祭壇の方から大きな轟音が響いた。

「い、今のは？」

「祭壇の方からみたいだね…どうしようか、コウ？」

今さら戻っても遅いんだろう。

しかし…ここまで来ると生命の危機に関わる。

ここで死ぬなんてのは避けなくてはいけない。

でも…

この胸騒ぎ…

行かなくてはいけないと言ってるようで…

「…トリル、もしもの為に穴ぬけ玉を用意してくれる？」

「うん…じゃあ行こう」

もしかしたら、この危機を僕らは止められるかもしれない。

そんな小さな希望と使命感がコウを前進させた。

トリルをちらりと見ると、目に緊張が浮かんでいるのが見えた。

「トリル、僕が居るから大丈夫だよ…きっと」

実際のところ、コウはポケモンとしての生き方は日が浅いはずだが、通常のリオルに比べて格闘のポテンシャルが高かった。

それは今までの闘いの中でも分かることではあったが、今回は場合が違う。

何かがおかしい。

本日何度目かのその思考を抱くが、もう遅い。

「さあ、入ろう。この奥から音が聞こえるよ」

一呼吸置いてから、2人は祭壇へと進んでいった。

第11話：暗夜の森で（後書き）

コウ「作者さんさ、僕達なんかこれから死にそうじゃない？」

トリル「僕も嫌だよ？序盤で主人公2人が死ぬ小説なんて」

し、死なすわけ無いじゃないか（一・一；）

えー、というわけでうちの小説の主人公2人を後書きに召喚してみました！

コウ「僕はコウ。得意技は気合いパンチ！よろしくね（気合いパンチも作者）」

痛いよそれ！？

トリル「僕はトリルだよ。なんかあっちがハチャメチャやってるから僕が説明するね。とりあえずしばらくはこの形式で後書きを進めるって、作者さん言ってたよ」

コウ「全く：毎回気合いパンチするけどやってける？」

それは勘弁orz

とまあこんなコンビですが、これからもよろしくお願いしますm（

――）m

コウ「ここでネタバレ。次回は視点がかw（略）」

サイコキネシス！

コウ「ぎゃあああ」

第12話..もう一人の人間(前書き)

すみませんorz

重大な脱字があつたので、加筆修正しましたm
┐
┘
m

第12話..もう一人の人間

時はさかのぼる。

トレジャータウンから北にしばらく行くと、そこには小さな集落がある。

夜もまだ明けぬ頃、一匹のキモリが集落から出て行った。

「みんな、悪いな。やっと真実を見つけたんだ…あいつに教えないと」

荷袋を肩に引っ掛け、集落を一度振り返る。

そして、キモリは南へ向かう道を歩いていった。



この季節、北部では乾いた風が吹き、気温も低下する。

寒さに弱いようであるこのキモリは、少し手足の冷たさを気にしていた。

「やっぱり、昼に出発するべきだったかな？」

小さくくしゃみをしたキモリは、せめて風だけは避けたいと道沿いの林に入っていた。

すると、

「うん？誰かが焚き火をしているのか？」

遠くに小さく明かりが見える。

「旅人か…ちょっと行ってみよう」

暖を取りたい、という本音は思考の隅に置いておいて、キモリは茂みを分け入った。

「おい、大丈夫か!？」

そこに居たのはヒトカゲ。ぐったりと倒れていて、尻尾の炎は弱々しく燃えていた。

「う…ここは…?」

うつすらとヒトカゲが目を覚ました。

「ここは北部の林の中だ。お前、どこから来たんだ？」

ヒトカゲがチラリとキモリの顔を見る。

すると、

「うわああ!?!キモリがしゃべった!?!」

急に目を見開いて、起き上がった。

「何言ってるんだ?お前だってヒトカゲだろう」

「え？」

落ち着いて、自分の手を見てみる。

オレンジ色で、少し硬めの皮膚。

小さく尖った爪。

腰を見ると尻尾があり、先端には小さく炎がついていた。

「そんな…オイラはカイ。人間のはずなのに」

「そうか、俺はポケモンのセリムだ。とりあえず、これを食べて落ち着け」

そう言って、セリムはキーの実をカイに差し出した。

「あ、ありがとう」



「それじゃ、気が付いたらここに居て、ここにどうやって来たかもわからないんだな？」

辺りから集めた木の枝と、セリムが技で出した木の葉で焚き火を始め、2人は焚き火を囲んでいた。

「うん…でもオイラ、一つだけ覚えてることがあるんだ」

「何だ？」

「女の人の声で、星見の丘に行け、って」

「星見の丘に？」

セリムが驚いたようだった。

「うん、でもどうすればいいかな？」

「…星見の丘はここからなら、南西に3日間歩いて行かなきゃいけないぞ？」

「え！？そんなにかかるの！？」

「ああ。というか、星見の丘に行けだなんてまた物好きな奴だな」

セリムがオレンの実をかじった。

「あそこは今は何もないぞ？」

星見の丘は、数年前に隕石が降り注いだせいで、そこにあった遺跡群は無くなってしまったのだ。

「え、そうなの？でも…行かなきゃ」

「ふうん…じゃあ俺がついて行ってやるよ」

セリムはおせっかい焼きな性格のようであった。

「え？…良いの？」

「ああ。俺も旅をしているところなんだが、星見の丘も見なくなつてな」

（それに、こいつなんだかトリルに似ている…）

「わあ！ありがとう！」

カイがセリムに飛びつく。

「おい、馬鹿！やめろよ！」

（…やっぱり違うかな）

セリムはすぐさま自分の思考を撤回した。

そのとき、

「うるさい！」

茂みの奥から、サイドンが現れた。

「おっと、お休み中だったか」

「ごめんねー」

しかし、サイドンの怒りはおさまらないようだった。

「悪ガキ共め！懲らしめてやる」

サイドンが予想以上のスピードで迫ってきたので、とっさに身をか

わし、2人は立ち上がる。

「へえ、カイってけっこう俊敏だな」

「セリムだってなかなかじゃん」

サイドンをよそ目に、2人は会話をする。

「お前達いい加減にしろ！」

どうやらサイドンが本気になってしまったようだ。

四方からステルスロックが飛んでくる。

「リーフブレード！」

キモリが拾った枝を持ち、リーフブレードを繰り出す。

するとたちまち岩は粉々に碎け散った。

「ふん、なめるな！」

サイドンが岩碎きを繰り出すも軽やかにセリムはかわし、サイドンの腕に飛び乗る。

「あんた、残念だね。この俺を相手にするなんて…葉っぱカッター！」

たくさん舞い散る木の葉をセリムはサイドンに向ける。

あまりにも多い葉っぱに、サイドンはうつかり目をつぶる。

「ぐう…くそ、奴らはどこだ？」

腕の上に居たはずのキモリや、そばに居たヒトカゲも消えていた。

「ねえ、オイラのこと忘れてない？」

足元に居たのは、瓦割りのモーションをとるカイが居た。

「何!？」

「あんまり馬鹿にしないでよね…瓦割り！」

サイドンの下腹部に、瓦割りが直撃する。

「うっ…このガキが！」

サイドンが痛みをこらえながら、思わずカイを蹴り上げる。

「わわっ！」

カイが足をバタつかせる。

「ふん！残念だったな！角ドリル！」

サイドンの角が激しく回転し、カイの左胸に照準を合わせる。

「さあ、食らえ！」

サイドンの角が、カイを貫いた。

と思いきや、カイがニヤリと笑って居なくなってしまった。

「何!?!」

辺りを見るが誰も居ない。

「朝日って良いよな」

「オイラも好きだよ。暖かいもんね」

声だけは聞こえるがどこにも居ない。

そして、声とほぼ同時に、東から朝日が差した。

その明るさにサイドンは眉をしかめるが、よく見ると朝日にかぶさる影があった。

「だってこの技は…太陽光がなきゃな!」

繰り出した技は、ソーラービーム。

朝日のような輝きを放ちながら、サイドンに突き刺さり、爆風を巻き上げる。

爆風が霧散し、サイドンの姿が見えた。

「ま、まだ倒れないの?」

カイが不安そうにサイドンに近づく。

「いや、立ったまま気絶してる。それより、早く行こうぜ。先はまだまだ長いからな」

「それにしても、朝日はキレイだね」

「ああ、俺達の旅の始まりを祝福してるのかもな」

「何そのくさいセリフ」

ふふふとカイが笑う。

「うるせえな。ほら早く行くぞ」

「うん」

2人並んで道を南に歩く。

その後ろ姿は、どこか希望に満ちていた。

第12話..もう一人の人間（後書き）

今回は2人はお休みです。

この話は、コウとトリルが会おう日の早朝の出来事です。

きっと皆さんお分かりでしょう。

カイとセリムはこの物語のもう片方の主人公達です（≧≡≦≡）

カイはおっとりとした性格で、嬉しいことがあると相手に抱きつくという、困った癖を持つ元人間のヒトカゲです。

一方セリムは世話焼きのキモリで、「真実を伝える為に」自分が住んでいた集落を出て行きました。

こんな風に、なかなか個性が濃い2人ですがひょんなことから出会いました。

この出会いは偶然か必然か？

それはまたこれからの話です。

第13話：方向音痴の先達者

その日の昼頃、セリム達はどこかの森を歩いていた。

「ねえ、ここどこ？」

「うーん、そうだな…」

セリムが森の岩に腰掛け、膝の上に地図を広げ、ノズパスをかたどった不思議な石を地図上に投げた。

すると石は地図上の東の方に吸い寄せられるように落ちた。

「この石は何なの？」

「この石は探知石って言って、地図の上に置くと自分の位置を探知してくれる不思議な石だ。昔世話になった人にもらった」

カイが面白そうな目で見る。
が、

「…じゃあ、オイラ達ここに居るんだよね？」

そう言って指を差す。

「そうだな。不思議なもんだろ」

「…オイラ達ここに行くんだよね」

今度は地図の南西、トレジャータウンから見て北東にある星見の丘を差した。

「ああ……あれ？」

セリムはようやくカイが言いたいことがわかったようだ。

「方向…逆だよね」

地図上では東。

しかしセリム達の目指す地は南西。

「あ、いや、そうだな…」

誇らしげだったセリムの顔が、一転慌てふためいた。

「セリムって方向音痴なんだ…ちょっと意外」

カイが呆れたように笑う。

「と、とにかく早く今は西に向かおうぜ」

「そんなこと言って、今度は北に行ったりして」

うるさいなあ、とセリムは顔が赤くなる。

（確かななあ。俺自身、どうにも方向音痴で…そういえば、あいつと会ったのも…）

「どうしたの？早く行こうよ」

はっ、と思考の中から帰り、目の前の旅の道連れを見るが、そこに居たのは懐かしい友ではない。

「…そうだな。さあ、行こう」

ふっと微笑み、セリムは地図をしまって立ち上がった。



「そういえば、セリムはなんで旅をしてるの？」

しばらくして、歩きながらカイが振り向く。

「ああ、俺か？俺はな、ある奴に会いに行く為なんだ」

「へえ〜どんな人なの？」

「そうだな…」

お人好しで、自立して生きてるしっかり者。
それでいて俺を一番理解してくれている人。

「へえ〜良い人じゃん」

「ああ。でも俺はそいつに一度だけひどいことをしたんだ」

セリムのしゃべりのトーンがいきなり暗くなる。

「どうしたの？」

セリムが立ち止まる。

「あいつは、行くあてのない俺を見つけてくれて、手を差し伸べてくれた」

（ねえ君、うちに来ない？）

「あの頃の俺は身も心も不安でやけになっていて…そんな時にあいつに会った」

（ふふふ、セリムって面白いね）

「気が付いたら家族みたいで…お互いの夢も話したり」

（僕の夢はね、この謎を解くことなんだ）

「それで、ある時だ」

「…良いな」

「え？」

思わず発言をさえぎられ、下がっていたトーンが上がる。

「セリムは目的のある旅をしてるじゃない？それっていいな。オイラは気が付いたら記憶もなく…頼る人もいない。帰る家もない。この旅も終わったらどうなるか」

カイができるだけ明るい口調で話そうとしているのが見えた。

「でも、オイラにはセリムが居る。ただ今はそれが嬉しい。」

「そ、そうか」

あまりのことに言葉を失う。

「もし、あのときセリムが居なかったらって考えると、オイラぞっとするよ」

その気持ちは自分も痛いほどわかる。

あの頃の自分がそうだったから。

「星見の丘に行って何もわからなかったら、オイラ、セリムについて行って良い？」

「ああ、もちろんだ」

お互い、会って大して時間が経っていないはずなのに、不思議と自分のことを話せた。

「じゃあ、改めて行こう」

くるりと振り返って歩き出す。

が、

「…セリム、オイラもう一つ言いたいことがある」

「何だ？」

「来た道戻ってどうするの？」

あ…

どんなことにも先達者は居て欲しいものであるというのが、この調子ではためである。



日が段々と暮れゆく中、2人は少し駆け足だった。

「ねえ、何でそんなに急ぐの？」

「ちょうどこの近くに俺が世話になった人の家があるんだ。今日はそこに泊まろう」

「へえ、楽しみだな」

上り坂を越えた高地の、泉の近くに小屋が見えた。

「あれのこと？」

「ああ。ラストスパートだ、全力で…走るぞ！」

セリムが急加速する。

「ちょっと待ってよセリム」

負けじとカイも後を追い、2人は小屋の前に着いた。

「ふう。ここは変わらないな」

小屋は木製のログハウスで、大きさは1人で暮らすには十分すぎるものだった。玄関の扉には表札もかかっていて、そこには名前も記されていた。

「トールレスさん？」

「ああ、エルレイドのトールレスさん。剣術の達人なのさ」

またしても、自信ありげであった。

「じゃあ、入ろう」

そういつてセリムは玄関の扉をノックした。

「トールレスさん、セリムです！入っても良いですか？」

トントンと、二回ノックしたが、返事はなかった。

「おかしいなー…って、扉が開いてる…」

ふと扉の取っ手に手をかけて、ゆっくりと回してみると、予想とは逆にすんなりと取っ手は動いた。

「ねえ、とりあえず中に入ろうよ。ちょっと寒くなってきたよ」

太陽はすでに見えない位置まで傾いていて、少しずつ気温も下がっていた。

「うーん、そうだな。とりあえず中に入ろう。帰ってきたら事情を言えればいいし」

取っ手を外側に引っ張り、扉を開けた。

「お邪魔します」

2人は声を揃えて、中に入った。



小屋の中は意外にシンプルで、家具も最低限しか揃えてないみたいであった。ベッドは2つあったが、もう片方は来客用であると、セリムは言った。

「でもさ、なんかほこりっぽいね」

確かにほこりっぽい。とセリムは言った。セリム曰わく、トーレスさんはキレイ好きで、掃除は日々欠かさずやっていたのだという。

「それに、台所も変だよ。切りかけの木の実が置きっぱなしになっているし」

カイスの実が、完全に切られずに放置されていた。

「とりあえず、この部屋の掃除をしよう。勝手に入ったわけだし」
セリムとカイがカイスの実をまとめだして掃除が始まり、しばらく続いた。

その後も2人はトーレスの帰りを待っていたが、なかなか帰って来ないので、2人はセリムが持っていたモモンの実を晩御飯として食べて、眠りにつくことにした。

ベッドはフカフカで、更に今日1日の疲れもあつてか、セリムはすぐに寝付いたようだった。

が、

「……………」

カイはまだ眠れず、暖炉にくべた薪が、時折弾ける音を気にしていた。

（なんでだろう？ 今日1日歩いたり走ったりで、体は疲れてるはずなのに）

ふと耳をすませば、声が聞こえる。

「カイ…聞こえていますか？」

女性の声で、自分と呼ぶものだった。

声は外から聞こえたので、カイはベッドから起き上がり、小屋の外に出ようとした。

扉を押して開けると、そこには、白い空間が広がっていた。

「こ、これは一体!？」

驚いたカイが小屋に戻ろうと振り返ると、そこには小屋はなかった。

「来てくれましたね、カイ」

女性の声が頭に響く。

「カイ、あな…命は星…の丘で…つこと…それを…はいけませ
ん」

女性の声がノイズのように頭の中で反響する。

「や、やめろ…オイラは…オイラは…」

あまりの不愉快さに、カイは目をつぶってうずくまる。

「やめてくれ！」

そう言って顔をあげたカイだが、目の前にあったのは、

「な、何をだ？」

カイがいきなり声をあげたので、驚いているセリムであった。

「あ…いや、寝ぼけてたみたい。ごめんね」

寝ぼけていたとカイは理由をつけた。

（あれは本当に夢だったのかな？ いやにはっきり覚えているし…）

「まあ、どんな夢見てたか知らんが、もう朝だぞ。ほら、これを食

べて出発だ」

そう言って、セリムはカイにカゴの実を渡す。

一口かじると広がるカゴの実のわずかな苦味。

それを味わいながら、カイは微笑みを浮かべていた。

第13話：方向音痴の先達者（後書き）

今までで最長になりました。

この2人にはしばらくほのぼのとした空気を送ってもらいます。

コウ「ねえ、いつ僕出れるの？」

もうちょっと待ってね（ー〇ー）

とにかく、これからもよろしく願います m（　　） m

第14話：寄り道

この日も1日、二人は道を歩き、少しずつ星見の丘へと近づいていた。

道中、色々なことがあったが、二人は乗り越えて行った。

「いやー、大変だったね」

カイがため息をつく。

「ああ、まさかケンタロスの群れにぶつかるなんてな」

トーレスの家を出発してから数時間後、一度広い野原に出た二人であったが、そこでケンタロスの群れに遭遇してしまい、一悶着あったのである。

「でもさ、ケンタロス達はどうしてあんなに怒ってたんだろうね？」

うん？、とセリムが顔をあげる。

「そりゃ、あそこはケンタロス達の縄張りだったんだろう」

「え？でも、今の時期にケンタロスって、あんなところに縄張りを張るのかな？」

珍しい、と言いかけたが、よく考えると有り得ないことだとセリムは考えた。

「確かに。普通は今の季節、ケンタロスは荒地に居るはずだな
：でも、よくカイは変だって気づいたな」

カイの尻尾の火が一瞬強く燃える。

「あ、うん。だってケンタロスってこういう草は食べないだろうな
って思ってた」

「まあ、確かに」

一瞬カイがひどく動揺したかのように見えたが、セリムは特に気に
しなかった。

「ところで、こちら辺に何か面白い所ない？」

ただ歩くのもつまらない？、と付け足す。

「そうだな、ちょっと南に温泉があるな」

地図を眺めながら、セリムは良さげなところを探す。

「え、温泉！？行きたいなあ！」

カイが目を光らせる。

「良いけど、カイはヒトカゲなのに大丈夫なのか？」

「それなら平気！見て！」

そうやってカイはセリムに尻尾を向ける。

すると、尻尾の炎が不思議な色に変わる。

「これは何だ？」

「これは、青い炎。この炎はどんなことがあっても消せないんだよ。でも、オイラ自身が死んだらダメだけどね」

本能に裏打ちされた習性なのだろう。

こんなこと、セリムも知らなかった。

「じゃあ、行ってみるか。方向も大してそれないし、ちょっとなら大丈夫だ」

二人は、南へと向きを変えた。



この地方には火山が多く、それによって水脈が熱せられて、ある時何かの拍子で温泉として湧き上がるのだという。

「中には温泉として吹き出さないうで、湖になるものもあるらしいな」

「へえ、楽しみだな」

カイはやはり嬉しそうだった。

その時、もう一つ大切なことがあったのを、セリムは思い出した。

「コータス長老？」

「ああ、この地方では一番の長寿って言われていて、物知りの人なんだ。もしかしたら温泉で会えるかもな」

「そんな凄い人も居るんだ！楽しみだな」

カイの瞳がキラキラ輝く。

「ふおっふおっふお。最近は何忘れが激しいがのう」

年を取り全てを見透かしたような、厚みのある声が聞こえたので振り返ると、そこにいたのは紛れもなくコータス長老だった。

「コ、コータス長老！？」

「あなたがコータス長老ですか？」

カイが無遠慮に長老に近づく。

「ふおっふおっふお。お主は若くて良いのう。若さがあればなんだって乗り越えられるのじゃ」

そんなカイを見て、長老はにっこりと笑った。

「長老、今日はどうしたんですか？」

嬉しそうなカイを横目にセリムが話しかける。

「今日はこの先の温泉に行こうと思ってな。お主達はどんなのじゃ？」

「オイラ達も温泉に行くんだよ。長老も一緒に行こうよ」

「お、おいカイ」

あまりにも親しげな話し方にセリムが戸惑う。

「それも良かろう。どれ、わしのとっておきの温泉場を紹介しよう」

「わーい！楽しみだなあ！」

二人はゆっくりと歩いて行く。

（…カイって、なんか凄いな）

セリムはカイに感心しつつ、二人の後ろを追いかけた。



「さあ、ここじゃよ」

コータス長老に案内してもらった温泉場は、一般の人達が行くような温泉場と違い、森の中に唐突に温泉が湧き出ているような場所で、温泉から立ち上る湯気により、辺りは霧がかかったかのような不思議な場所であった。

「こんな所に温泉があったんですね」

「良い所じゃろう。肩こりに効くからわしはよく来るんじやよ」

コータスに肩はあるのですか、と言いかけたが、セリムは黙ってい

た。

「さあて若いのが、ここは年寄り向けで熱いから気をつけるんじゃないよ」
最初にコータス長老が足を入れた。

「セリムが先に入りなよ」

カイが温泉のふちでためらっているようだった。

「良いぜ」

セリムは恐る恐る足を踏み入れた。

「熱っ！」

予想以上の熱さに、セリムは一旦足を引き上げたが、意を決して一気に肩まで浸かっていった。

「くうー。熱いけど、段々体に慣れてきて気持ち良いな」

「ふおっふおっふお。そうじゃろ」

じんわりと体を温水が包み、セリムの疲れをほぐしていく。

「へえ、じゃあ入ろっ」

そう言ってカイが右足を入れたが、すぐさま肩まで浸かり、一旦潜ってしまった。

「おい、カイ!？」

「ふゝ。ちょうど良い湯加減だね」

「そうか、お主は炎タイプか」

炎タイプは元から体温が高めなので、この程度では熱いと感じないようだ。

現にコータス長老も全く熱さを感じてないようだった。

「なんかオイラ、自分がポケモンだってこと改めて実感するなあ」

「なんじゃお主、自分がポケモンじゃないかのような言い方をしようって」

まずい。カイが元人間であることを隠すように言うべきだった、と後悔していた。

「うん。だってオイラは元々人間だよ」

案の定、あまりにサラッと、かつ笑顔で自分の正体を暴露してしまった。

「ひょえええ! 人間じゃと!？」

驚きのあまりに、コータス長老が飛び上がってしまう。

「はあ…コータス長老、実はですね…」

セリムは今までのいきさつと旅の目的を長老に話した。

「ほう…そりやまた大変じゃったのう」

「うん。でもオイラは大丈夫だよ。だってセリムが居るもん」

「お、おいカイ…」

あまりに屈託のなく無邪気な発言で、セリムは熱さのせいかな恥ずかしさのせいかな、顔が赤くなっていた。

「ふおっふおっふお。旅は良いぞ。わしも若い頃はあちこちに旅したもんじゃよ。世界樹の頂上や、水晶でできた洞窟、花の咲き乱れる草原なんかを見て周ったもんじゃ。」

「世界樹の頂上にですか!？」

「わしが若い頃は、あの樹はトゲ山くらいだったんじゃよ。軽い登山気分じゃった」

トゲ山は、トレジャータウンの東部にそびえ立つ山脈の一つで、その高さはセリムがいた集落から見えるほどである。

「す、凄い…」

改めて、セリムはコータス長老に感心し、尊敬の意を抱いていた。

「へえ、爺さんそんなに凄かったなんてアタイは聞いてないよ」

突然少し大人びた女性の声が聞こえたが、辺りの湯気のせいで姿が見えない。

「久しぶりに来てみたら、新入りが来てるなんてね」

ゆっくりとセリム達の正面にポケモンの影が現れる。

「ふおっふおっふお。帰って来たのか、マニユーラ」

ずんずんとお湯の中を歩いてきたのはマニユーラであった。

「爺さん、何回言ったら分かるんだい？アタイはマイラ。マ・イ・ラよ」



「で、あんた達はどうしてここに？」

温泉のふちに腰掛けて、マイラは足湯を楽しんでいるようだ。

「オイラ達は寄り道しに来たんだよ。本当は星見の丘に行く途中なんだ」

「星見の丘かい？またへんぴな所に行こうとしてるねえ。あそこにはお宝も何もないよ？」

「お宝？」

カイが首をかしげる。

「マイラはのう、有名な探検隊のリーダーなんじゃよ。はて、名前を何といったか…」

その時、セリムの頭に一つの探検隊が浮かび上がった。

「も、もしかしてチームMADですか!？」

「いかにもそうさ。どうやらアタイのチームも有名になってきたみたいだねえ」

チームMADは、近年大活躍をしている探検隊で、マニユーラ、アーボック、ドラピオンで結成されている。

そのチームMADのリーダーが、今日の前に居るのである。

「有名になるのも大変だねえ。この間よくわからない探検隊がアタイ達に弟子入りしてきたんだよ」

「どんな人達なの？」

カイは水面をぱちゅぱちゅ叩いていた。

「なんか、そこらに居るチンピラみたいだったよ。番長気取りなスカタンクに腰巾着なドガス、一番下っ端のようなズバットって感じだったね」

「世の中には面白い人も居るんだね」

「アタイはあんた達なら弟子にしても良いわよ。骨がありそうだし」

マイラがちらりとセリムを見るが、セリムは目をそらした。

「まあ、あんた達には旅があるみたいだね。じゃあ、そろそろアタイは出発するよ。そろそろ近くに相棒共が来るみたいだからね」
マイラが温泉から上がり、体を震わせて水滴を飛ばした。

「そうだ、あんた達の名前は？」

振り返ってマイラがこちらを見る。

「俺はセリムです」

「オイラはカイだよ」

「セリムにカイか。あんた達とはまた会いそうだね」

にっこり笑い、マイラは湯気の向こうに消えて行った。

「ポケモンの世の中にも色んな人が居るね」

「ああ、世界は案外広いんだ。さあカイ、俺達もそろそろ出発だ」

「うん。じゃあ長老、ここまでありがとうございました。」

カイがぺこりと頭を下げる。

「ふおっふおっふお。わしはまたここに居るからいつでも来なさい。
たまには若い者と話すのも良いな」

二人はコータス長老に再び精一杯のお礼をし、温泉を後にした。

第14話：寄り道（後書き）

お久しぶりです（・ω・）

今回は色んな人物を出しました。

もちろんどれも、後々大事な人物として物語に深く関わります（
△、）

中にはどこかで聞いたような奴らも居たり？

m 短くなりましたが、これからもよろしくお願いしますm（
┐┌

第15話：重傷

翌日、二人は西へと歩みを進めた。

旅を始めた日から早3日、地図上では間もなく星見の丘の近くである。

「そういえばさ、星見の丘の近くって泊まる所とかあるの？」

カイが尋ねた。

「確か里があったはずだな。名前は……そう、星の里だ。懐かしいな」

「へえ、行ったことあるんだ」

「前にな。星見の丘が観光地だった頃はいろんな人が来てたらしいんだ」

その言い方は、現在の状況はそれと反するようであった。

もうすぐ星見の丘。

星見の丘に行け、という言葉に従ってここまで来たけど、本当に何かわかるのだろうか？

それとも…

「おい、あれ見ろよ」

考え事していたカイはセリムの声で現実に戻った。

セリムが指差した先にあったのは、数匹のポケモンだった。

「離してください！」

「へ、良いじゃねえか姉ちゃん。ちよつとそこまで来てくれよ」

サーナイトがエビワラーに絡まれているようだった。

「なんだあいつ、女の人に絡んでる」

草むらに隠れて小声で話す。

「かわいそう…セリム、助けようよ？」

「そうだな、行こう」

セリムが草むらから音を立てて飛び出してくる。

その音を聞いて、エビワラーとサーナイトの二人がセリムを見つけた。

「なんだお前は！」

「早くその女の人を離せ！」

構えをとるセリムを見て、サーナイトは小さく驚いた顔をして胸の赤い突起をキラリと光らせた。

「リーフブレード！」

セリムが先制し、リーフブレードをエビワラーの右胸に振りかざした。
が、エビワラーは寸前でかわしてカイの右頬に炎のパンチを打ち込む。
パンチは火をまとしてセリムの頬にめり込み、その火力によってセリムの肌を焦がした。

「うっ」

セリムはパンチの勢いのまま数メートル転がった。

「へ、ガキが粹がってんじゃねえ！」

エビワラーが氷のパンチを倒れてるセリムの腹に打ち込もうとしたのを見て、カイはもう見ていられずに草むらから飛び出そうとした。

（待って。もう手は打ってあるわ）

突然頭の中に女性の声が響いたので、カイは踏みとどまる。

と同時に、エビワラーは声をあげて倒れてしまった。

「一体どうしたの？」

カイが静かに草むらから姿を現し、エビワラーに近づく。

「……………」

エビワラーは深い眠りについていた。

「ふう、助かったわありがとう。私はサナ。詳しい話は後にして、今はあなたの友達を助けましょう。さあ、こっちへ」

そのサーナイトは、とても優しげな微笑を浮かべた。

「うん！オイラはカイだよ」

「さあ、彼の手をつかんで」

サナがカイの手を握り、カイがセリムの手を握った。

「……テレポート！」

その瞬間、三人は薄い青の光に包まれて姿を消した。



「セリム、起きて」

俺を呼ぶ声が聞こえる。

誰の声だろうか？

懐かしい友の声？

いいや、それは…

はっと目を覚ますと、そこには知らない天井が広がっていた。

「ここは…？」

「セリム！良かった、目を覚ましたんだね！」

横にいたのはカイであった。

カイは思わずセリムに抱きつこうとしたが、怪我人であることを思い出して思いとどまった。

「ああ：それよりここは？」

「ここは星の里にある私の家よ、小さな勇者さん」

隣の部屋からサーナイトが出てきた。

「あ、あなたはあの時の？」

「サナさんだよ。重傷のセリムを助けてくれたんだよ」

セリムがサナの顔を見る。

すると、誰かに似ているような気がした。

「ふふ、似ているのは当たり前だわ。私はトーレスの妹よ。兄がお世話になったみたいね」

第15話：重傷（後書き）

短くてすみません m () m

最近風邪を引いてたりしてなかなか文章構成が進みませんでした。

また次の更新は遅れるかもしれませんが、よろしくお願いします。

第16話：そして悪夢へ

祭壇の奥へと二人は入って行く。
歩いていく中、コウは再び「波」を感じていた。

今回の波はさっき見たような波とは全く違い、薄墨色で粘性を持つてコウの体に絡みついてくるもので、その淡さは、まるでコウの心を虚ろに染めるようであった。

（う…なんだかとても辛い…）

突然コウの意識の中に辛さが芽生えるが、自身が望んだものではないのである。

なぜこんなに辛いのか？

あいつが居ないからだ

あいつ…あいつって？

忘れたのか？

頭の中で自分と何かが対話している。

「ねえ、大丈夫コウ？」

あまりのコウの辛そうな様子に、トリルが横から不安げに覗いてくる。

「ああ、うん、大丈夫だよ。危険な所だから対策を考えてたんだ」

「うん…気をつけようね」

トリルが改めて探検袋の中を確認する。

そのまま少し歩くと、そこで上に向かう階段を発見した。
階段は螺旋階段になっているが、明らかに段数が多すぎた。

「これは一体？」

「わからない……」

何かの影響、といっても何の影響かは周知の通りだが、臆することなく二人は階段を上っていく。

ぐるぐる、ぐるぐる、ぐるぐる。

ずっと階段を上っていく。

何周したかわからない頃に、不意に光が見えた。

「出口かな？」

光に一步踏み出したら、そこは一変し、四方を石柱で囲まれた遺跡の中のような場所であった。

そして、奥の方からうなるような音が聞こえてくる。

「まだみたいだね」

「うん、先に行こう。声がさっきより大きい」

静かに、かつスムーズに歩いていく。

すると、広い所に出た。

きっと祭壇の本殿なのだろう、不思議な魔法陣が床に描かれていて、天井には天窓があり、中心には井戸のような場所がある。そして、黒いポケモンがこちらに背中を向けていた。

「……来たな」

声に反応して二人は足を止める。

黒いポケモンには、コウ達が来ることは分かっていたようだ。

「あなたは？」

「……ダークライ。悪夢の司者さ」

ダークライが振り返って、ニヤリと笑いながらコウ達を見た。

その笑顔には本能に訴えかける恐怖を感じ取れた。

「あ、あなたはまさか…一連の探検家襲撃の犯人？」

トリルが恐る恐る尋ねる。

「ふん、邪魔する奴を排除しただけだ」

つまり、イエスと言うことだ。

「そして、お前達も邪魔しにきたんだろう？」

「……」

今度はコウ達が無言で答える。

「まあ、もう無意味だがな。悪夢はもうすぐ…そこまでせめて、楽しませてくれ」

ダークライを、黒い「波」が取り巻いていた。

そして、静かに戦いが始まった。

はじめに仕掛けたのはコウ。

気合いパンチの構えを取りながら、電光石火のスピードでダークライに近づき、一撃をこめた。

しかしダークライには当たらず、拳の勢いが余って、コウはよろめいてしまう。

「甘いな、サイコキネシス！」

近距離で食らった為、頭にサイコキネシスがけたたましく響き、コウは意識を失いかける。

「やめろ！電気ショック！」

トリルがすかさず技を繰り出したが、電気ショックは何故かダークライから逸れてしまう。

「なんで！？」

「ふん、シャドーボール」

左手から黒い光球を数発トリルに放つ。

「やめろ！」

サイコキネシスが直撃してボロボロのはずのコウが、トリルをかばう。

シャドーボールは全てコウの背中に命中し、爆煙をあげた。

「コウ！」

煙が晴れると、コウは辛うじて立っていて、肩で息をしている状態であった。

「くそ、あんた、どうしてかわせるんだ？」

「私はお前達とは訳が違う。今の私は、何者も止められぬ……もつとも、波紋を使えるなら別だがな」

ダークライはコウをあざ笑った。

その時、真ん中の井戸のような場所から黒い炎が上がる。

「何!？」

「ふ、始まったのさ。伝説の災い、悪夢の黒炎がな」

黒い炎は上へとあがり、天窓を割り外へと抜けていく。

「や、やめろ……」

コウがボロボロの体を引きずりながら、ダークライに近づく。が、もはやダークライの体には触れることができなかった。

「無駄だ。お前に私は触れない」

「くそ、なんで…なんでだよ…」

コウがうずくまり、慌ててトリルが駆け寄る。

「最後に、教えてやろう。これは悪夢の黒炎。遙かな伝承に語られている災いだ。この炎に纏われた者は心を黒く染められ、あるものは夢にうなされて夢から出られなくなり、またある者は心地良い夢で出られなくなる」

「これが、悪夢の黒炎なの？」

「ああ、並の者は触ることすらできない。そう、今の私もだ。私は悪夢の黒炎を自らの力にしている」

黒炎にダークライが手を入れ、黒炎をつかんだ。

「なんだって…」

「者共が夢に苦しむ様、それが私の糧になる。さあ、話はここで終わりだ。良い夢を見れることを祈ってやろう」

ダークライが黒炎をコウ達めがけて投げつけた。

（くそ、僕は無力すぎる…このままでは、このままではダメだ！）

あわや炎に包まれる瞬間、コウ達を水晶の壁が守った。

「なんだと!」

「コ、コウ!？」

(守らなきゃ、守らなきゃ、だから力が欲しい…!)

その瞬間、井戸とコウ達を水晶の壁が取り囲み完全に遮断した。

「まさか、お前……いや、いい。井戸は封じられたが、黒炎はだいぶ広まった。それで十分だ。さらばだ、波紋を手にした者よ、いつかまた会おう」

ダークライは暗闇に消えていった。

そして、コウ達を包んだ水晶が崩れた。

「コウ、しっかりして、コウ!」

トリルがコウを起こそうと必死でコウを揺する。

しかし、コウは目覚めず……静かな寢息を立てていた。

「……ふふっ」

トリルは安心して気が抜けてしまった。

その時コウが寢言を言った。

「僕が…星見の丘で…」

トリルはその言葉に耳を傾けていた。

「星見の丘？あそこに行くの？」

「うん…会う……に」

だんだん寝言は不明瞭になり、そして聞こえなくなった。

星見の丘。

そこに新たな旅路への鍵がある。

やがて、トリルも眠りについたのであった。

第17話：声の示す先

目覚めなさい。

あなたは眠っていてはいけません。

行くのです。

星見の丘へ。



誰かの声が頭に響いた。

女の人の声だ。

目を覚ますと、石の天井が見えた。

そうだ、月の社に居たんだった。

ガバッと上半身を起こし、辺りを見回す。

石室の真ん中には水晶のような物体で封じられた井戸があり、コウの隣ではトリルが毛繕いしていた。

「あ、おはよう。やっと目覚めたんだね」

「あ、うん。今ってもう朝かな？」

「たぶん朝だと思うよ。天窓に、うつすら日が差しているし」

天窓の下まで行き、天井を見上げる。

まるでカーテン越しに見た昼の空のような光が差していた。

「外に出てみようよ」

「そうだね」

二人は探検袋を肩にかけて、石室をあとにした。



外に出ると、暗夜の森はいつもより明るかった。

「変だね、ポケモンの気配もしない」

「まるで、みんな眠ってしまったような…」

きよろきよろ辺りを見回す。

「そうだ、あの建物にヨマワルが居たよな」

「見て行こうよ」

建物のドアを開けると、以前は見えなかった部屋の様子がわかった。中にはただ一つ、簡素なベッドが置いてあり、そこにはあのヨマワルがうつ伏せで居た。

「寝てる…のかな？」

コウがそっとベッドに近づいて、ヨマワルの様子を覗く。

「恐ろしや…恐ろしや…あ、悪夢が…」

「だ、大丈夫ですか!？」

うなされている様子を見て、コウがヨマワルを揺する。
しかしヨマワルが起きることは無かった。

「きっと、ダークライの黒炎にやられたんだね…」

『この炎に纏われた者は心を黒く染められ、あるものは夢にうなされて夢から出られなくなり、またある者は心地良い夢で出られなくなる』

「あいつが言ったことは本当だったんだな」

二人は建物を出て、ひとまずトレジャータウンに向かうことにした。
ギルドのみんなは無事なのかという思いが頭の中を巡っていた。



トレジャータウンに着く頃には、真昼であった。

道中、やはりポケモンの気配は無く、二人は不審に思っていた。

「ここなら、誰か居るよね？」

「そうだと良いな」

東門を二人はくぐり、東地区に入っていた。

東地区にはヨマワル銀行やエレキブルの連結店があり、日中は人通りも多いはずだった。

今はそこには、コラッタ一匹さえ居なかった。

「そんな…」

「……いや、見て」

コウが東地区の裏路地を指差すと、そこにはゴルダックが居た。しかし、耳を澄ますと真相が聞こえてきた。

「へ、ちよろいもんだ。みんなして寝ていやがる！盗っ人には大チャンスだぜ」

「あいつ…！」

「構ってもしようがないよ。早く行かないと見つかるぞ」

珍しく怒りを隠せない様子のトリルを、コウはどうか西地区に連れていった。

西地区にもやはりポケモンの気配は無く、二人は閑散とした商店街を歩いていた。

「ここにも誰も居ないな」

「ガルーラおぼさんの蔵はどうかかな？」

行ってみよう、と二人は駆けていった。

蔵の前には、色々な物資が散乱していた。きつと、生きてた探検隊達が慌てて荷物を持っていったんだろう。

「蔵の仕掛けは動くみたいだな」

「うん、じゃあ僕達も荷物を出そうよ」

そう言ってトリルは仕掛けの操作板をいじり始めた。

「トリルも荷物預けてたんだな」

「お母さんが残してくれたものなんだけどね。おばさんに頼んで、僕が出せるようにしてもらったんだ」

言い終わる頃に、仕掛けが動き出して程なく二人の前に、大きめの古びた箱が現れた。

箱を開けると、中にはたくさんのおレンの実と、種が十数個、技マシンが何個か、そして不思議玉が3つ入っていた。

「これは一体？」

「お母さんが残した、たくさんのお探検隊道具だよ。いつか僕が使うようにって」

二人は道具を探検袋に分け入れた。

「これからどうする？」

「ギルドに行こう」

ここまで見てきて誰もほぼ居なかった。
となると残るは、タウンで一番高い場所のギルドに避難しているかもしれない。



ギルドの丘の頂上に着くと、そこは変わらぬ外観を保っていた。
ただ一つ、入り口の柵が壊れていることを除いて。

「誰か居るかな？」

「行こう。足元に気をつけてな」

飛び散った柵の木片を避けながら、二人は中に入っていくた。

最初のハシゴを降りて地下1階、ギルドの依頼受付所に着いた。
やはり誰もいなく、静けさが包まれていた。

「みんなどこかな？」

そのまま更に下に降りていった。

地下2階、ギルドの弟子達のフロア。

上のフロアとはうって変わり、ここは荷物が散乱していた。
しかし、やはり人の気配は無い。

「親方の部屋を見てみようよ」

ハシゴを降りて近くにある、プクリンの部屋に入った。

中是不思議と言うか相変わらずと言うか、荷物が散らかっていた。

ごちゃごちゃした荷物の上に、真新しい一枚の便せんがあるのを見つけた。

「これは？」

「親方が書いたのかな？」

『探検隊アンバーへ、勝手にギルドを抜け出したら駄目だよ♪ 今度会うときに、お仕置きのたぁー！するからね♪ 僕達はみんなで星見の丘に避難するからね♪ プクリン』

内容はこうだった。

「親方は相変わらずだね」

「みんな生きてるみたいだな」

ふと、あることを思い出す。

行くのです。

星見の丘へ。

(そうだ、夢の中でも…)

何かの偶然とは思えない。

つまり、そういう運命なのだと確信した。

星見の丘に行けば、何かが分かる。

自分の記憶、『波』のこと、ダークライのこと。

コウは急に行動の意志を持ったのであった。

「……星見の丘に行こう」

「え、プクリン達に合流しに？でも、たあー！されちゃうよ？」

「違う、口では説明できないけど、行かなきゃいけない気がするんだ」

もどかしい感覚を、コウは上手く説明できない。

「コウがそう言うなら、早く行こう？今から行かなきゃ、日が暮れちゃうし」

そうして、二人はギルドを後にし、星見の丘へと向かった。



星見の丘に着いた頃、二人の頭上にはオレンジ色の空が広がっていた。

「ふう、ふう、早いよコウ…」

1日で山と谷を幾つも越える、リオルの種族的なポテンシャルにはなかなかついていけない。

「ここが、星見の丘？」

「そうだよ。今はただの丘だけど、昔は遺跡があって…って、コウ！」

きよろきよろ見回した後、コウが急に走り出した。

「誰か居た！」

コウの目には、3人の人影が映ったようだ。

コウの足は、まっすぐに丘の頂上に向かう。

そしてそこには、3人のポケモンが。

「あんたは誰だ？」

3人のうち、1人が身構えながらコウに質問した。

「僕はコウだよ。君は？」

「俺の名前は…」

そして、全てが動き出した…

第17話：声の示す先（後書き）

コウが星見の丘の頂上で出会ったポケモン達とは？

と言っても、お分かりでしょう。

次回は、彼ら視点でいきます。

第18話：再会

コウ達が暗夜の森に居たその日の昼過ぎ、星の里のサナの家のこと。

「へえ、じゃあサナさんはしばらく師匠に会ってないんですね」

セリムが差し出されたナナの実の皮を剥きながら言った。

「ええ、かれこれ3年くらいかしら。最後に会ったのはトレジャータウンだったわね。カイ君も食べる？」

サナがナナの実を、窓から外を見るカイにも差し出した。

「あ、ありがとうございます♪」

カイは嬉々として実を受け取った。

「サナさんはなんでここに居るんですか？」

「私？私はね、ある人を待ってるの」

「それってセリムの師匠さんのこと？」

カイも話に加わった。

「ううん、ずっと昔のことなの。私の夢の中に、不思議な女の人が出てきたの」

あなたは運命を見守る人です。

いつか、この世界を救う者が現れます。
その者を星見の丘に導きなさい。

（なんか、オイラの見た夢に似ているな…でも、そんなにはつきりしなかったけど）

「それでね、私はそれからここで生活してるのよ。来るべきその人の為にね」

「へえ、もしかしたらセリムだったりして」

自分のことを言いたかったが、あえてカイはセリムに話を向ける。

「お、俺が!？」

案の定、セリムがうろたえていると、

「あら、もしかしたらそうかもよ？近頃ね、強いテレパシーを感じるの」

サナの予想外の言葉が飛んできた。

「え!？」

カイ達が同時に声を上げた。

「なんなら、あなた達星見の丘に行ってみる？」

それを聞いて、カイは自分のことを言う決心がついた。

「あの、サナさん…オイラ見たんです。その、星見の丘に行けという、女の人の夢を」

半分冗談混じりだっただろうサナの顔に、驚きの表情が浮かぶ。

「え、じゃああなた、カイ君が…？」

「かもしれないんです。俺達は、その夢を頼りにここまで来ましたから」

セリムが今までのいきさつをサナに話した。

「そう…なら、明日行きましょう。今はまだセリム君のケガもあるし」

行く気まんまんだったセリムは大事なことに気づいた。

「あ、そうでした」

「じゃあ、私は今から傷によく効く木の実を取ってくるわ。奥の棚の中に、チーゴの実があるから、好きに食べて大丈夫よ」

そう言って、サナはテレポートを使って消えてしまった。

「行っちゃったね」

「ああ、そしてもうすぐだな」

うん、と窓の外を再び眺める。

「何か分かったいいね」

「……………」

「セリム？」

振り返り見ると、セリムは静かな寝息を立てて眠っていた。

「セリムったら…オイラもお昼寝しよっ」

カイはイスにもたれかかってゆっくり目を閉じた。



結局そのまま夜遅くまで寝ててしまい、二人はサナに起こされた。

「もう、二人とも寝ちゃダメよ。はいこれ、傷に一番効く木の実よ」

サナは不思議な木の実をセリムの手に渡す。

「これは？」

「これはチイラの実よ。難病や重傷に効くって昔から言われてるの。
さあ、これを食べて」

セリムが木の実をかじった。

「おいしい！どこに実がなってたんですか？」

「テレポートを使って、どこかの遠い島まで行ってきたの」

「テレポートですか!？」

「ええ、私は普通のサーナイトよりエスパーが強いみたいなの。こういう時に役立つのよ」

不思議な人である、とセリムは思った。

「まだまだあるから、持ってたね」

リムは受け取ったチイラの実を荷袋に入れた。

「良かったねセリム」

カイはチーゴの実を食べていた。

「さあ、今夜は早く寝て明日に備えましょう。私は隣の部屋で寝るから、何かあったら知らせてね」

そうして三人は眠りについた。

真夜中のこと。

サナははるか南東の方から邪気が昇るのを感じていた。

ただあまりに短時間だった為、邪気はここまで来なかったという。

無論、それをカイ達は知らぬまま眠っていたのであった。



次の日

「さあ、出発しましょう。星見の丘は実はまだ遠いのよ」
しっかり荷物を整えたサナが嬉しそうな顔をする。

「もしかしてサナさん、こういうの好き？」

カイが面白そうな目でサナを見る。

「ええ、まあ…昔ちよつとね。それより準備は大丈夫？」

何かありげだったが、聞かない方が良いとカイは悟った。

「俺も準備は大丈夫です」

セリムはセリムで、あつと言う間に治ってしまった傷を驚いていた。

星の里、そこは人の気配がなく、実に寂しい場所であった。

里の中を歩いていても、誰かとすれ違うことはなく、廃墟ばかりがサナ達を見ていた。

「私がここに住みだした頃はこうじゃなかったわ。ただ、隕石を恐れた人が多すぎて…」

里を通り抜けると、林の小道に出た。

ここを抜ければ星見の丘だと、サナが言った。



甘かった、とセリムは感じていた。
何にかというと、道のりについてであった。

林の中は果てしなく木々が陰鬱と並んでいて、セリムは日光が恋しかった。

もちろん、無くて大丈夫だが。

「はあ、もうやだな：日光が恋しい」

だらりとしぼみながら歩き、愚痴をたらす。

「もうすぐだから頑張つてよセリム。オイラも空気が濁ってて、炎の調子が良くないんだ」

いつもは元気に燃え盛っていた尻尾の炎は、今ではとろ火である。

「この辺りは誰も立ち入りませんからね。整備がされてないので
よ」

サナは、ただ1人軽快な足取りだった。

そして、

「二人とも、見えてきましたよ。あれが星見の丘です」

急に林がひらけた。

そこは、今回の終着点である。

星見の丘は、いくつかの遺跡が発見されており、一説では古代の月の社ではないかと言われている、発掘を主とした探検家達で活発だったという。

空は既にオレンジに染まりだしていた。

「でもね、数年前の隕石落下で誰も寄りつかなくなったの」

「それなんです、何があったんですか？」

尻尾の炎をゆらゆら燃やしながら、カイは歩く。

「私も人づてで聞いたんだけどね、その隕石からポケモンが生まれてたらしいの」

「隕石からですか!？」

「ええ。丘の頂上にある月の社の近くに居たらしいの」

「じゃあみんなで頂上に行こうよ。オイラ、隕石見てみたい」

カイが声をあげる。

「おいおい、さすがにもう残ってないだろ」

「ふふふ、そうね。でも遺跡の跡は見れるわよ」

そうして、三人は丘を登り始めた。

登る道すがらには、色々な草花が咲いている。

丘を登り切ると、そこには巨大な穴が空いていた。

「ここが、隕石の落ちた場所なの？」

穴は地中深くまでえぐられていた。

「ええそうね。そしてそこが遺跡の入り口の…」

その瞬間、カイ達の背後から一匹のポケモンが飛び出して来た。

真っ先に、セリムが身構えた。

「あんたは誰だ？」

そのポケモンは、ゆっくりと辺りを見回してからセリムを見た。

「僕はコウだよ。君は？」

そのポケモン、リオルは自らをコウと名乗った。

そのリオルからは不思議と敵意を感じず、むしろ何故だが親しみが湧いた。

「俺はセリムだ。あんたはこんなところまで何しに来たんだ？」

自分の名前を聞いた瞬間そのリオルは驚きの表情を見せた。

「セリム？君ってまさか…」

「ねえ、速いよコウってば」

何か言おうとしたリオルを別の誰かがさえぎった。

しかしセリムには、聞き覚えのある声であり、心臓が突然割れるように鼓動しだした。

（まさか…あいつが、トリルがここに？）

丘を登ってき、あらわになった発言者の姿は記憶にある通りで、疑惑は確信となった。

「本当にこういう体力してるの…あれ？もしかして、セリム？」

「トリル…なのか」

何という事だ。

カイの旅に連れだってこんなへんぴな地に来たのに、会ってしまうだなんて。

せめて、自分から会いに行きたかったと思うが、もはや無駄である。

そして、ついにここに全ての歯車が揃った。

世界を救う、4つの歯車が噛み合い始めたのである。

第18話：再会（後書き）

いやーここまで長かった。

コウ「長かったじゃないよ作者ああああ」

セリム「更新遅いんじゃないああああ」

コウはともかく、セリムはいきなりそのキャラか

（〇；）

カイ「やっとオイラもここに来れたよ！」

トリル「長旅ご苦労さまだね」

そんな訳で、連載開始から約2ヶ月（本当に）で、ついにここまで来ました。

主人公勢がやっと集結です！

最初はこの方法に自分でも疑問を持ちましたが、なんだかんだで丸く？収まりました。

次からは、基本的にコウが主体として話を進めていきます。

どうか、これからもよろしくお願いします！

第19話：遺跡の奥で

「私はサナよ。あなた達も、ここに来るように夢の中で言われたのね」

サナがコウ達の事情を聞いた。

「はい。あなた達もってことはサナさん達もなんですか？」

「うん、そうだよ！オイラはカイ。オイラが夢を見たんだよ」

挨拶をしてなかったカイがサナの隣に来て元気に言った。

「お、おいカイ…」

相変わらずの秘匿性の無さに、セリムは苦笑いを浮かべる。

「へえ、君がか…」

コウはじっと、目の笑顔をヒトカゲを見る。

すると、頭の中に声が聞こえてきた。

「コウは、行かなきゃいけないもんね」

「オイラは…」

（今の声は？あの時、ギルドで聞こえてきた声といっしょ？）

「どうしたの？そんな変な顔して」

つぶらな瞳で不思議そうにカイが見つめる。

「へ、変って言うなよ。僕は本当は…」

人間だと言いかけたが、こらえた。

なぜか知っている気がする相手だが、さすがに信じてもらえないだろう。

「本当は…どうしたんですか？」

急に言葉が詰まるコウを、サナも不思議そうに見る。

とっさにちょうど良い言葉が思い浮かばなかったコウは、

「も、もっとカッコよくなりたいんだよ」

自分に合わない言葉を言ってしまい、顔を赤くした。

「ふふふ、コウらしくないね」

トリルがちやかすように笑う。

つられてサナやカイも笑う。

場がぱあっと明るくなった。

そんな中、セリムが戸惑いの顔を浮かべていた。

「どうしたのセリム？」

「ああ、久しぶりだからさ」

少し、控えめにトリルを見る。

「やっぱりか。トリルが前に言ってたのはこいつなんだな」

コウがさらりと暴露すると、トリルの尻尾がピクリと反応する。

「ちょっとコウってば」

トリルが慌てふためきながらセリムの反応を見る。

セリムは黙っている。

「あ！君がセリムの親友なんだね。セリムから色々聞いてるよ」

今度はセリムがピクリとなる。

「ば、馬鹿言うなよ…あ、トリル」

セリムからトリルに声をかけた。

「な、何？」

「その、久しぶりだな。本当は俺から会いに行くつもりだったんだが、とにかく今は約束は忘れて欲しい」

約束、という言葉に反応したトリルは静かに頷いた。

「うん。じゃあ、また落ち着いたらその時ね」

トリルが右手を差し出すのを見て、セリムも手を出して握手を交わした。

コウ、カイの二人が心配していた同じ問題が解消されたみたいで、ホッと安堵の声が漏れる。

「ねえあなた達、私を忘れてない？」

サナがふん、とふてくされていた。

「あ、すみません。トリル、コウ、サナさんは星見の丘にある遺跡に案内してくれるんだ」

忘れてたかのように、サナの紹介をするセリム。

「そうなんですか、よろしくお願いします！」

「もう…良いわ、ついて来て。予言のポケモンがあなた達かもしれないし」

そう言って、サイコネシスで遺跡の入り口のがれきをどかした。



「ここはね、隕石が降る前は丘の上に立つ遺跡で、古代の月の社だ
って言われていたのよ」

遺跡は地下にあり、ひんやりしていた。

寒いところが苦手なセリムは、少し嫌そうな顔をする。

「サナさん、詳しいんですね」

「昔、ここらに出入りしてたの。だからね」

ひょっとして、サナさんは探検家だったのではないかと思うトリルであったが、あまりに予想がつかず言うのをためらった。

「わあ、壁画があるよ！」

遺跡の入り口を抜けた広間には、8対の壁画が描かれていた。

「これは、古代の神様達ね。もう長いこと誰も来てないから、損傷は激しいわね」

コウが入り口に一番近い壁画に目を見る。

そこには、虹色に輝く翼を羽ばたかせる鳥ポケモンが描かれていた。もっとよく見ようと近づいたが、トリルに、はぐれるからと連れられてしまった。

更に行くとは、行き止まりであろう広い空間に出た。

そこは月の社にあった石室に酷似していた。

「ここは一体？」

一段と冷え込むので、セリムはカイに近づいて暖をとろうとした。

「きっと古代の祭壇ね。真ん中の台座を中心に方角が示されてるわ」

サナがかがんで床面を触る。

「なんか不思議だね」

カイがヒョイと台座に乗る。

すると、台座を中心に光が広がり始めた。

「な、何!？」

コウ達は目をつぶる。

「カイ、離れろ!」

セリムがカイの手を引き、台座から降ろしたが、更に光は広がり、周囲を白く包み込んだ。



コウが目を開けると、そこは不思議な霧に包まれていた。辺りを見回してみると、正面に三つの人影が見えたので、走って向かう。

「コウ!」

それはトリル達三人で、サナの姿は無かった。

「ここは一体?」

「わからない。ただ、俺達が知るような場所ではないってことだ」

カイはただ黙っている。

「どうしたの、カイ君？」

「オイラのせいかなって思ってたさ…」

カイの尻尾の炎が弱っていた。

「そんなことないだろ。あんな仕掛け、誰にもわからなかったし」

コウがカイのそばに寄る。

「でもさ…」

「でもないよ。確かに大変な目にあってるけど、みんな生きてるんだから、カイが責任負う必要はないよ」

カイがじっとコウを見つめる。

「それに、面白そうじゃない？だから、僕は楽しみだよ」

「うん、ありがとうねコウ」

コウの笑顔が、カイの気持ちをほぐした。

すると、周囲の霧が晴れだした。

「やっと、会えましたね。無垢なる人間の子らとその友よ」

女性の声が、霧の中の4人に聞こえてくる。

「今のは!？」

「夢の中に出た人だ!」

カイが声を上げる。

「カイ、あなたは真に無垢で、故に選ばれたのですね。コウ、あなたは真に勇敢で、故に選ばれたのですね」

「なんで僕の名前とカイの名前を!」

コウが声のする方に身構える。

やがて、霧が一つに纏まりだし弾けた。

霧が晴れたこの部屋を見ると、壁や天井が夜空の星のようにポツポツ光を放っていた。
まるで、宇宙のように。

「申し訳ありません。私はここでしか真に姿を現せられないのです」
弾けた霧の向こうに居たのは、月のような美しい光を放つポケモンであった。

「あなたは誰ですか？」

「私はクレセリア。コウ、カイ、あなた達人間をこの世界に呼んだ張本人です。早速で申し訳ありませんが、あなた達には行ってもら

わなければいけない場所があります」

クレセリアは、優しい微笑みをたたえている。

第19話：遺跡の奥で（後書き）

さあさあ、クレセリアさんがでて参りました。

トリル「張本人ってどういうこと？」

まあ、コウやカイがこの世界に来た原因ってことだよ
(一・一；)

トリル「そうなんだ…ってカイ君も人間だったの！？」

ん、気づかなかったか？

トリル「まったく…」

精進しなさいww

それでは、また次回

(・ω・)ノシ

第20話：対話（前書き）

ちょっと修正しましたorz

タイトルの通り会話文ばかりですorz

あと、クレセリアが好きな方には申し訳ありません

m
┌
└ m

第20話：対話

（カイが元人間？）

コウはカイの驚愕の事実を言われて、言葉も出ないようだった。カイはというと、黙って俯いて居た。

が、

「コウも人間だったんだね！オイラ嬉しいな！」

喜んでいるようだった。

「カ、カイ？」

「だって、自分の仲間が居たら嬉しいじゃん♪コウはオイラのこと知ってる？」

やはり、カイも記憶喪失なのだろう。自分の過去を知りたがっているようだ。しかし、それはコウも同じこと。

「いや、ごめん。僕も何も覚えてないんだ」

「うーん、じゃあしょうがないね」

カイの火が、少しシュンとした。

「二人共、話はまだ続きますよ。」

クレセリアは、優しいまなざしで二人を見る。

「コウ、カイ、そして二人の選ばれたポケモンよ。この世界の運命はあなた達に委ねられました。今、世界は悪夢に包まれんとしてます」

「それは、どういうことなんだ？」

セリムが戸惑ったように言う。

「先日、とある神話が再現されてしまいました。遥かな昔、私はダークライという悪しき野望を持つ者と対立しました。そのとき、私はダークライを打ち倒し、その力を封印しました。」

「悪夢の黒炎、だね」

トリルが呟いた。

「トリル、知ってるのか？」

「その者とコウは月の社にて、ダークライと出会い、この話を聞いたのです」

どうやらクレセリアには全てお見通しのようだ。

「うん。でも、余り詳しいことは分らないんだ」

「悪夢の黒炎は、ダークライの種族に伝わる特殊な能力です。その力は黒い炎で相手を包むことで、相手を悪夢に引きずりこみます。」

ダークライは、悪夢を糧に生きる者。一度悪夢に墜ちた者はダークライが望まぬ限り、永久に目覚めることはないのです」

「それだったら、ダークライを倒せば良いんじゃないの？」

コウが不思議そうな顔をする。

「ええ。しかし、そうもいかないのです。ダークライは神出鬼没で、一度見失うといつ会えるか分からないのです」

「それはなんでなんだ？」

「あの者は、人の夢を通じてあらゆる空間を移動できるのです」

あらゆる空間を移動する、という摩訶不思議な能力を持つことに四人全員が言葉を失った。

「無理ありません。それ程あの者の力は強大なのです。私はもちろんその力を危惧し、再びこのようなことになるのを恐れ、その力を封じるある物を用意しました。それは『波紋の珠』です」

波紋というワードに、コウは再び惹かれていた。

「波紋の珠？」

「はい、かつて我が創造主が私に与えたものです。中には退魔の波紋が込められています」

波紋。

ずっと自分が気になっていた言葉。

なぜ自分はこんなにこの言葉に反応してしまうのだろうか。

もしかしたら、クレセリアには何かが分かるかもしれない。

「ねえ、波紋って何なの？」

意を決して、コウはクレセリアに尋ねた。

それを見て、クレセリアはフツと笑ったように見えた。

「波紋は、言ってみるなら、全てのものが持つ意志の具現化したものです」

「全てのもの？じゃあ、この石ころにも波紋があるのか？」

セリムがヒョイと足元の石を拾う。

「ええ。しかし小石から出てる波紋はあまりに微弱で感じ辛いのです」

クレセリアが困った顔をした。

「その『波紋の珠』はどこにあるの？」

「『波紋の珠』はここから少し東の、水晶の湖にあります」

それを聞いて、セリムが目を見開いた。

「水晶の湖だあ？そんなの歩いてすぐじゃねえか。なんで自分で行けないんだ？」

セリムが言うには、水晶の湖は歩いて十数分、クレセリアのように飛べるなら数分で着くという。

「ええ。私もできるなら、再び自らの手でダークライを封じたかったのですが…」

クレセリアが言葉に詰まってしまった。

「…先ほど、私はここでしか真に姿を現わせられないと言いましたが、それは全くの真逆。むしろここでしかこの姿を保てないのです」

その言葉の意味、つまりクレセリアは…

「まさか、クレセリアはもう…」

トリルが核心に迫る。

「その通りです。私は数日前に、ダークライに命を奪われました。私はダークライの計画の最大の難点であつたようです」

では、どうやって姿を現わしているのだろうか？

四人の思考には、謎ばかりが蓄積される。

「ここは星見の丘特有の空間で、名を星幽の間と言います。ここでは時の流れが遥かな河の一滴のごとく緩やかなのです」

体が滅ぶのを可能な限り遅めている、ということである。

「そう、なんだ…」

コウ達全員が沈黙する。

「…」

全員、立て続けの衝撃的な事実の前に考えの整理がつかないようだった。

「行こうよ、みんな」

沈黙をトリルが裂いた。

「トリル？」

「僕ね、月の社で実際にダークライを見たときとても怖かった。あんな恐ろしい気配を持つポケモンが居るんだ、ってね」

全員がトリルの告白に耳を傾ける。

「戦ったりもして、でも全く歯が立たなくて、本当に死にそうになったんだ。だからね、あんなポケモンがもしこれ以上悪事をするんだとしたら、それは止めなきゃいけないことだと思っただ。僕、自分でも考えの整理がつかないけど…」

トリルがハッキリものを言うのは珍しいことだ、とセリムは考えたが、きつとコウのおかげなのだろうと感心していた。

「僕も行くよ、トリル」

コウがトリルの肩を軽く叩いた。

「オイラも手伝うよ！」

カイが近付いてきた。

「俺もやるぜ。こんなトリルは初めて見たな」

少し照れくさそうにセリムも言った。

こうして、四人の気持ちが一つになった。

「ふふふ、さすがですね。やはりあなた達で良かった。では、水晶の洞窟に行ってください。洞窟の主に、話を伝えておきます」

そして、再び辺りに霧が立ちこめて、視界は真っ白になった。



その後、四人は元の遺跡の中でサナと再会して、サナにさっきあったことを説明した。

するとサナは、自分の予知夢は本当だったのだと驚いていた。

そのまま遺跡を脱出したコウ達は、星見の丘の下でサナに別れを告げた。

「サナさん、驚いていたね」

「そりゃな。ところで、トリルはもしかして探検家になったんだな」

セリムがトリルの探検袋についている、探検バッジを指差した。

「うん、コウと一緒に探検隊を組んでるんだよ。そうだ、セリムとカイも一緒に探検隊をやろうよ」

探検隊になったものは、自由に自分のチームに仲間を加えられるのだという。

「ああ、良いぜ。な、カイ？」

「オイラも大賛成！」

コウも賛成だ、とうなずく。

「じゃあ改めて、探検隊アンバーの結成だね。皆、頑張ろうね！」

四人は、並んで水晶の湖への道を歩いていった。

第21話..水晶の洞窟

歩き続けて十数分、四人は色々話しながら、洞窟の入り口に着いた。そこが、水晶の湖への入り口のようにであった。

「湖ってこの中にあるの？」

「ああ、だから水晶の洞窟とも言われるんだ。でもすぐ湖に着くぜ」セリムは湖に行ったことがあるようだ。

「懐かしいね。前にも来たよね」

トリルが感傷的な声色になる。

「こんな所にもポケモンは居るのかな？」

今まで殆どポケモンの姿を見なかった為、カイはつまらなそうだった。

「ともかく、行こうよ。もしかしたら、湖の主も黒炎にやられてるかもしれないよ」

コウが洞窟の先の、かすかに青い光が差す所を見ていた。

そうして、四人は洞窟に足を踏み入れた。



洞窟の中はそう暗くなく、涼しい空間が一本道で続いていた。

「不思議な所だね。洞窟の中なのに暗くないや」

コウが両手を頭の上で組みながら歩く。

「この中はな、水晶の光の反射がすごくて、昼間はいつも明るいんだ。その分、夜中は真っ暗なんだ」

「その時はオイラが頑張るよ！」

カイが尻尾の炎を小さく燃え上がらせた。

「わっ、熱いよカイ！」

熱気が自分の尻尾に当たっていて、トリルは思わず飛び上がった。

「おい、あまりうるさいと洞窟のポケモンが出てくるぞ」

セリムがなだめるように笑う。

しかし四人は楽しげに歩いていた。

その時、洞窟の奥から真空波が飛んできた。

「伏せて！」

コウの声で全員がうまくかわすことができた。

「言わんこっちゃない。出てきたじゃないか」

セリムが木の棒を構えると、他の三人も構えを取った。

奥からぼんやりと現れたのは、白い体毛に覆われ、ナイフのような爪と鋭利な鎌のような頭部、そして赤い眼光。そう、そのポケモンは…

「ア、アブソルだと…」

セリムが肩をビクつかせる。

「アブソル？」

コウはやはりなぜセリムがそんな反応するか分からないようだ。

「あ！君はまさか暗夜の森に居た…」

あの夜、突然目の前に現れたポケモンが居たのを思い出した。赤い眼光を持ったあのポケモンを。

「ふん、そのピカチュウは覚えてたみたいだな。いかにもそうだ」

アブソルが首を鳴らした。

「なんでこんな所に居るんだよ…災いポケモンが」

「災いポケモン？」

今度はカイが首をかしげた。

「ふん、そう言うか。まあ無理もないさ」

アブソルがニヤリと笑うと、尖った歯が見えた。

「昔からアブソルの種族は災いポケモンといわれて迫害されてたんだ。確か二年前につがいのアブソルが見つかった以来、確認されていないんだ」

トリルの説明が入った。

「ああ、そうさ。そして私が本当に最後のアブソルさ」

「なんだって？」

構えを続けるセリムの頬に一筋、汗が垂れる。

「そのつがいは…いや、いい。それより私がここに居る理由が分かるか？」

一瞬殺気が消えたアブソルは何かを言いかけたが、言葉を飲み込んだようで再び威嚇するような気を放つ。

「ここで何か起こすんだろ？それなら俺が止めて」

「それは違うよセリム」

セリムの言葉をトリルが横から遮った。

「なに？」

「アブソルっていう種族はね本当は災いを知らせるポケモンなんだよ。それが勘違いされて…ねえ、ここで何が起こるの？」

既にトリルは構えを解いてアブソルに対し敵意を持ってないようだった。

カイもトリルと同じで、コウは構えは解ききっていなかったが手を降ろしていた。

対等に話しかけるトリルを見て、セリムは戸惑いを隠せないようだった。

「ふ…お前の考えが当たっているかは別として、教えてやろう。凍てつく吹雪は水晶のごとく透き通り、水面をも凍てつかす。そのピカチュウ、また会うことはないだろうが、名前を聞こう」

アブソルがトリルに興味を示したようだ。

「僕はトリルだよ。君は？」

「…私に名乗る名前などない」

そう言って高速移動のようにアブソルは素早く消えていった。

セリムはようやく構えを解いた。

「あいつは…」

「分からないね。でも僕はまた会いそうな気がする」

コウはアブソルに、波紋というワードを聞いたときと同じ胸のざわ

めきを感じていた。



「ねえ、出口が見えてきたよ！」

少し歩くと、洞窟の奥から光が強まってきた。

そして、洞窟を抜け出した。

「ここが…」

水晶の湖は洞窟の奥の、広まった場所に湧き出ていた。

洞窟の壁面は一面が様々な色の水晶が刺さっていて、天井からも水晶が鍾乳石のように伸びている。

透き通った湖の水面には

水晶の色が映っていた。

「キレイだね…」

その景色に全員が絶句していた。

感動する四人めがけて、奥から、虹色の光線が飛んできた。

「何!？」

水晶のような体色のポケモンが湖面を切るように走り、こちらに向かってくる。

体毛は波打つようにしなやかで美しい。

すつと四人の前に降り立つと、一声叫び声をあげた。

「何者だ？」

「僕達はこの湖の主に用があつて来ました。あなたは？」

キツイ口調に対し、コウが答えた。

「我が主に？さては嗅ぎつけられたか：我が名はスイクン。ここを通すわけにはいかない」

スイクンが吹雪を巻き起こしながら、まず先にとコウに向かっていった。

第21話：水晶の洞窟（後書き）

スイクンVS探検隊アンバー！

戦いの行方はいかに…？

コウ「勝てるかな？」

第22話：アグノム

飛びかかろうとしたスイクンにコウが拳をぶつけようとした瞬間、湖の対岸にふわりとポケモンが現れた。

それに気づいてか、スイクンはリフレクターを張ってコウのパンチを受け止め、湖面に着地した。

「な、なに？」

「：アグノム様、来てはいけません！」

「スイクン、その者達はクレセリア様選ばれた者です。無礼を働いてはなりません」

そのポケモン、アグノムは静かに浮きながらこちらに来了。

「はっ。失礼しました」

それを見て、スイクンは敬意を示すように水上で伏せた。

「あんたが湖の主か？助かったぜ」

セリムが胸をなで下ろす。

「アグノムって本当にあのアグノム？」

「ええ、私はアグノムです。この水晶の湖の主にして、意志の神を司らせて頂いています」

トリルが言葉を選ぶようにゆっくり言ったのを、アグノムは笑顔で答えた。

「凄い！本当にアグノムは居たんだ！僕ね、アグノムのことを神話の本で読んだんだよ」

トリルの目が水晶のようにキラキラ輝く。

「ふふふ。そんな昔の話が伝わっているなんて嬉しい限りです」

「なあトリル、アグノムって？」

コウが戸惑い気味でトリルに問う。

「アグノムはね、世界が誕生したときに生き物に意志を与えた神様なんだよ！」

「え！じゃあアグノムってめちゃくちゃ年上？」

コウはそうは見えない、といったげな目でアグノムを見る。

「ふふふ。残念ですが、この肉体は425代目の肉体です。私のような神の体は転生を続けて生き続けるのです。ただ、記憶は受け継いでいます」

アグノムが宙をくるりと舞う。

「なあトリル、楽しげなところ悪いんだけど、本題に…」

なぜかコウが申し訳ない気分になった。

「あ、そうだね。アグノム、僕達は波紋の珠を取りに来たんだ」

トリルがずっと真面目な顔になる。

「ええ、話は聞いています。スイクン、彼らに向こう岸まで連れてきて下さい」

アグノムはそう言って先に対岸に行ってしまった。

「ア、アグノム様！…お前達、早く背中に乗れ」

スイクンは仕方ないと思いコウ達に背を向けた。

最初にトリル、次にコウ、その後カイが乗ったところ、スイクンの背中に乗る場所が無くなってしまった。

「どうするセリム？」

ううむ、と困っているところにコウが手を差し伸べた。

「捕まりなよ。僕は腕力も凄いんだよ」

さあ、と二度手を出すとセリムは意を決してコウの手を握りしめた。

「準備は良いな。行くぞ」

スイクンが水面に足を踏み出してゆっくり歩き出した。

「凄い、なんで水面を歩けるの？」

「スイクンはね、北風の生まれ変わりともいわれていて、汚水に身体を触れさせることで水を浄化できるんだよ。だから水面を歩くのも自在なんだよ」

トリルが嬉しそうに説明する。

「お前、詳しいんだな」

スイクンが感心していた。

「トリルは昔話が好きだもんな」

セリムが自分の立ち位置にひやひやしながら言う。

「うん！だって面白いじゃない？」

「ふ、私のような神に仕える者としても嬉しい限りだ。語り継がれるべき物語は既に幾千と失われている。三龍神の戦争や、星の生まれ変わり…私とてもはや名前しか覚えておらぬ」

自分の知らない神話の逸文を聞いてトリルはときめいていた。

そうする内に、対岸に着いた。

そこには小さな木造の社があり、中からは光が溢れていた。



社の外で待機するスイクンに礼を言い、四人は中に入っていた。

「ここは？」

「ここは水晶宮といいます。奥にあるのが波紋の珠です」

天井の方からスルスルとアグノムがおりてきた。

「水晶宮？」

さすがにトリルにも聞き慣れない単語のようだった。

「この水晶宮の他に、雷鳴宮、灼焰宮の二つの社があります。そこにはそれぞれ、このこと同じように波紋の珠が祭られているのです」

「そんな所、聞いたこともないな」

セリムが驚いたように言う。

「無理ありません。なぜならどの社も簡単には見つからない所に、隠されるように建っていますから」

「そんなに大切なんだね」

カイは背伸びをした。

「さあ、こちらへ」

アグノムが手招きする。

社の奥の台座の上、そこには深い青色に光をたたえる珠が安置され

ていた。

「これが波紋の珠です。この珠には、かつてダークライを打ち破った力が封じられています。さあ、これを持って次は鈴鳴りの塔に行ってもらいます」

「鈴鳴りの塔？それって西の果てにあるやつか？」

セリムは知っているようだった。

「じゃあセリムは行ったの？」

「ううん、名前だけだよ」

代わりにトリルが言った。

「鈴鳴りの塔は、チリーン一族が管理する古代の遺跡です。昔から、鈴鳴らしの参拝を行うことで有名なのです」

「それで、なんでそんな所に行くの？」

「はい。実は塔の頂上にダークライの行方を知れる物があります。それは、ハウオウ像です」

「ハウオウ？」

全員が首をかしげた。

「ええ、ハウオウ様は、我らの創造神様が初めに生み出したポケモンです。その体軀は翼を広げればハクリューを横たえたような雄大

さを持ちます。そしてその翼で世界各地を駆け巡り、神通力でいかなる物をも見抜きます」

「でも、その塔にあるのは像なんじゃないの？」

トリルの言うことは最もであった。その力はホウオウ自身の物ではないのかと。

「その像は紛れもなくホウオウ様だと伝わっています。故にその像には神通力が備わっています」

「そんなのありかよ…」

セリムがため息をつく。

「ともかく、鈴鳴りの塔に行けばいいんでしょう？ どうやって行くの？」

コウは聞き分け良く？ 次の行動にうつろうと考えているようだ。

「それならこれを使ってください」

そう言うと、アグノムは台座の脇の空間に裂け目を入れて、謎の空間を生み出した。

覗いてみたところ、色々な景色が垣間見えた。

「これは空間の裂け目。私がここから鈴鳴りの塔まで送りましょう。さあ行ってください」

どうする？ と言いたげな目でコウは三人を見る。

「まあ、よく分からないが行くしかないんだろ？この世界の為にな」

そうだよ、とカイも頷く。

トリルはもちろん賛成の意を示した。

「よし、行こう」

コウが波紋の珠を受け取り、探検袋に入れた。

さあ、と意気込み四人は裂け目に入っていった。

第22話：アグノム（後書き）

まさかの一日二回目更新？

コウ「ちやつちい文章だけどね！」

O
r
Z

第23話：鈴鳴りの塔

アグノムが切り開いた空間の裂け目の中は、なにやら奇妙な景色が広がっていた。

右を見れば砂浜が、左を見れば森が目映る。

コウ達四人はその中を、ふわふわしながら移動していく。

少しすると、遠くに光が見えてきた。

近づいていく度、光が強まるため、目をつぶってしまった。

気づくと空気が変わっていた。

どこか暑さが残る涼しい空気、さながら秋のようである。

光が収まり、閉じたまぶたの中が暗くなるのを確認して、コウは目を開いた。

「ここは？」

季節は春にも関わらず、そこは紅葉が舞い散る森であった。

「そんな…なんで？」

どうやらセリムにも分かないみたいだ。

辺りにポケモンが居ないかと見回すと、なんとリーシャンがいた。

「見て！リーシャンが居た！」

思わず声を上げたトリルにそのリーシャンは気づいたみたいで、こちらに近づいてきた。

「あれ、君達どこから来たの？」

見たところ、子供のようであって、首からカバンをかけていた。

「あ、僕達気づいたらここに居たんだ。君はどこから？」

コウが可能な限り素性がバレないように対応した。

「僕はねー鈴鳴りの塔に住んでるんだよ。良かったら君達もおいでよ。もう日が暮れちゃうし」

それは思ってもなかったチャンスであった。

どうやらリーシャンは目的地を知ってるみたいだった。

「ああ、じゃあお願いするよ」

それを聞き、リーシャンは嬉しそうに前を歩き出した。

「ねー、リーシャン君はなんでここに居たの？」

カイは紅葉を燃やさないように尻尾の火を可能な限り小さくしている。

「僕ね、この紅葉を採りに来たんだよ。綺麗でしょ！」

そうやってリーシャンはカバンを開けた。

中には色づいた葉が詰まっている。

「凄いね！」

カイとリーシャンがお互いに笑い合う。

息というする二人を見て、子ども同士何か分かり合えることがあるのだろうと思うコウであった。



「さあ、ここが僕の住む塔だよ」

紅葉色の森の中、ぽつんと建つのが見えた。

塔の周りにはチリーンが一匹、キョロキョロとしていた。

「あ！お兄ちゃん！」

リーシャンがそのチリーンを見つけるやいなや、全速力で駆け寄っていった。

「あ、リーン！ダメじゃないか。外は危ないって…ああ！」

そのチリーンがコウ達を一目見た瞬間驚愕の表情を浮かべた。

「？」

「もしか、コウさんとトリルさんですか？…良かった。私です！ギルドに居たチリーンです！」

思考を巡らせる。

『ねえ君達、新入りですよ？何しに来たんですか？』

そう、それはギルドに最初に来た時に出会った、あのチリーンであった。

「案内役のチリーンさん！」

トリルの顔がパツと明るくなった。

「嬉しい！覚えていてくれたんですね！あるとき、コウさん達の安否だけが分からなくて…」

あるとき、というのは悪夢の黒炎が拡散したときである。

「ご、ごめんなさい。僕達、次の日にはタウンに行っただけど…」

「最初ギルドの皆さんと行動してましたが、私は自分の種族の住むこの塔に帰ろうと思い、ここに来たんです。ああ、本当に良かった。詳しい話は中でしょう。さあ、案内しますよ」



鈴鳴りの塔の中は、一階～二階が居住スペース、三階が神事場、四階～六階が塔の本殿であるらしい。

チリーンはコウ達に塔内を説明しつつ、コウ達はカイやセリムをチリーンに紹介した。

「さあ、ここが私の家ですよ」

そうして案内されたのは、居住スペースの住宅の中でも広めの家だった。

「すごく広い家だね！」

「ええ。父が神事場の司祭をしていますから…」

少しばかり、良い家に住めているのだという。

四人は住宅の中の一室に案内された。
そこには二段ベッドが二つ置かれている簡素な部屋だった。

「皆さんと積もる話はあるんですが、今日はもう遅いですし、ゆっくり休んで明日にしましょう」

全員がその意見に賛成であった。

こうして、四人にとってそれぞれ久しぶりの、完全な休息が取れる時間が訪れたのであった。

第23話：鈴鳴りの塔（後書き）

やや短い投稿orz

遅くなってすみません＞＜

第24話：祭り

お前は変わらないな。

………

ああ。

………

過去へ、な。



ハッと目が覚めると、コウは汗をびっしょりとかいていた。
心臓が早鐘のように鼓動する。

「……水を飲もう」

鈴鳴りの塔の中、ギルドに居たチリーンの住居の部屋で、コウ達四人は少しの休息をとっていた。

もうすぐ夜明けだろうか、遠くの方で小さく人々の声が聞こえる。

（そういえば、ホウオウ像でダークライの行方を知ってもどうやってそこに行けば良いのだろうか？）

天井を見ながら物思いにふける。

（このまま旅を続けてたら、僕は、自分の正体が分かるかな？）

未だ記憶が戻らない上に「人間」についての手がかりも見つからない。

（でも、間違いなく何かの使命があつて僕はここに居るんだよね）

そう思うと、少し楽になれた。

周囲を見ると、仲間が眠っている。

トリルは静かに眠っている。

セリムは下に敷いた毛布に抱きつくようにうつぶせに眠っている。
カイは……

「ふふっ」

布団の下に顔を突っ込んでいた。

極端にひどい寝相に思わず小さく笑った。

（そうだね。僕にはみんなが居る。だから、大丈夫）

落ち着いた気持ちで目をつぶったら、すぐに再びの眠りに落ちた。



次の朝、チリーンに案内されて四人は三階の神事場に来た。

神事場の重々しいドアを開けると、柱が立ち並ぶ部屋の中には大小様々な鈴が飾られていて、側には奉納者が書かれているであろう、木札がかかっていた。

「その鈴は、何年か前に親方、プクリンが奉納してくれたものですよ」

カイが手にした鈴を見て、チリーンが説明した。

木製の鈴の柔らかな音色が部屋に響く。

「旅人よ、鈴に触るでない」

カイの真上に、少し年をとったように見えるチリーンが現れた。

「わわ!？」

「父上、またそんなことをしてるのですか？」

驚きのあまり尻餅をついたカイの側にチリーンがやってくる。

「チリーン、じゃあこの人が？」

「ええ。私の父上で、神事場の司祭、神事名が……なんでしたっけ？」

「お前はわしの神事名も忘れたか。わしはジングル、今はそう呼ばれておる」

困った顔のチリーンに、ジングルは一瞥した。

「それで、お主らはなんでこんな所に？」

「僕達、ホウオウ像を見にきたんです」

コウがジングルにいきさつを説明した。

「……ふむ、しかし今は待ってくれないかのう」

ジングルが申し訳なさそうにする。

「どうしてだ？」

「……あ、そうでした。コウさん達、実は昨日からこの塔では鈴鳴らし祭りを行っています」

思い出したかのようにチリーンと言う。

「鈴鳴らし祭り？」

「この塔の伝統ある祭りじゃ。塔の最上階にある『豊かの鈴』を目標指して、四人の子どもが参拝するのじゃ。豊かの鈴を鳴らすことで、我々はその年の豊作を祈るんじゃよ」

「へえ！じゃあオイラ達で行ってみようよ」

「カ、カイ？」

好奇心旺盛というか、無鉄砲というか、カイには躊躇という言葉がないようだ。

「ははは、是非そうしてもらいたいのう。今、塔の上層は不思議のダンジョンになっててな、わしらのような大した戦いもしない部族

ではダンジョンを抜けられないんじゃない？」

二つの意味で予想もしない答えが返ってきた。

「じゃあ、行くしかないんじゃないか、コウ？」

セリムがやる気満々に枝を取り出した。

「僕もそう思うよ。そのまま屋上に行けば一石二鳥だよ」

こうして、チームの意見が結論づいた。



「ふう、なかなか広いな」

鈴鳴りの塔は四階からダンジョン化していたが、運良く次の階段をすぐに見つけて、コウ達はだっ広い部屋が続く五階に居た。

「やっぱり探検って良いね！こんな歴史ある所を探検できるなんて……」

「トリル、後ろ危ないぞ」

セリムの声を聞いてすぐに電磁波を背後のコラッタに浴びせた。

「見ないで攻撃した……」

「トリルは昔から自分の研究を邪魔する奴には容赦しないからな……」

セリムが身震いをする。

「じゃあ、セリムはそんなことしたことがあるの？」

セリムの肩が一瞬ピクリとする。

チラッとトリルを見るが、トリルは話に気づいてないようであった。

それを見て、セリムはゆっくりうなずいた。

「へえ、オイラも気をつけなきゃ」

カイが企んだようにニヤツと笑った。

「みんな、やっと階段が見つかったよ」

コウがほとんど息を荒げずに、隣の部屋から出てきた。

階段を上ると、次が最上階からか、階段のゴールに巨大な木製の両開きの門が佇んでいた。

「さあ、行こう」

コウは左の門を押して中に入っていた。

鈴鳴りの塔最上階、そこは言葉で言い表せない素晴らしい芸術の数々が眠っていた。

「凄い……」

トリルが毛羽立ちながらはしゃぐ。

壁際には二対の長い屏風が、天井には荒々しいタッチで雄々しく羽ばたく鳥の壁画が描かれていて、そのどちらもがトリル達チームアンバーの胸に感嘆の意を沸かせた。

部屋の奥には、マルマインの何倍もの大きさの鈴が天井から吊されていた。

「あれが、豊かの鈴だね」

きしきしと床が鳴る中、四人は豊かの鈴へと歩いていった。

第24話：祭り（後書き）

久しぶりの更新です。

コウ「なんであそこで今回終わったの？」

まあ、待っててYO

コウ「むう……」

第25話：刺客と夢と

四人が歩いて部屋の中頃に来たその時、鈴の後ろから一匹のストライクがすつと現れた。

「おい、お前ら何の用だ？」

ストライクは威嚇の体勢である。

「僕達は豊かの鈴を鳴らしに来た。あなたはどのようにしてここにいるんですか？」

ここはチリーン族の住処なのに、という意味を含めてコウは言った。

「俺はな、ある人にここに来る奴を殺せと言われてな、ずっと待っていたんだ」

「ある人？」

「ああ、だが誰でも良いだろう？なぜなら今、お前らは死ぬんだからな」

ストライクは、高速移動をしながら向かって来た。

「みんな、避ける！」

コウ、トリル、セリムの三人は横に回避する中、カイはじつとストライクを見ていた。

「カイ!？」

「バカな奴め! 辻斬り！」

ストライクの右の鎌が黒く光り、目にも留まらぬ勢いでカイに襲いかかった。

「へえ…それぐらい見えるよ」

よくカイを見ると、いつものんびりとした口調とはうって変わり、かつ目が据わっていた。

「カイ、避ける！」

言われるが早いか、カイは辻斬りの太刀筋を一步ズレるだけで回避した。

「なんだと？」

「ふふ…あれ? 危ないなあ！」

軽く笑ったあと、カイは元通りに戻っていた。

「ちいっ! 何だこいつは？」

(さっきの殺意から、今ののんびりした感じ…もしかしてこいつは…)

ストライクも、自信の辻斬りが簡単に避けられて驚いていた。

「今だ、電磁波！」

あっけにとられてるストライクの背後にトリルが回り込んでいて、自らの尻尾に電気を溜めていた。

「くそ！ならば、竜巻！」

まさかであった。

ストライクが左手を大きく振り上げると、空中に竜巻が発生し、トリルに襲いかかった。

「わわ！ど、どうして！？」

トリルが竜巻に巻き込まれながら段々と後退していく。

「トリル、それ以上退がると危ないぞ！」

セリムが竜巻の轟音の中に居るトリルに聞こえるよう、大声で言った。

「で、でも！うわっ！」

ついにトリルが壁に押し付けられる。

が、竜巻の勢いは止まず、部屋の壁がミシミシと悲鳴を上げる。

そして、

「う、うわああ！？」

壁が崩壊し、トリルが外に放り出された。

「トリル！」

三人が空いた穴に駆け寄り、トリルの行方を探した。
辛うじて、森の木の上に落ちたのが見えた。

「トリル：お前、何てことを！」

セリムが声を荒げる。

「ふん、言ったはずだ、殺すってな。あいつもこの高さからじゃ、ただじゃ済まないだろう。お前らもうかつだな、敵に背を向けるなんてな」

ストライクはあざ笑うように両手を振り上げた。

「くそ、しまった…」

「竜巻！」

二重に襲いかかる竜巻に、コウ達はなす術もなく、バラバラに外に放り出された。

（くそ：このまま終わるのか？）

落ちていくなか、コウは塔に手を伸ばす。

無論、届くわけもなくコウの意識は強烈な痛みによって失われた。



どうしちゃったのかな？

……

あんなこと、どうして？

……

やっぱり、コウのせいだよ。



コウが意識を取り戻す。
辺りには、トリル達が揃っていた。

「コウ、大丈夫？うなされてたみたいだけど……」

トリルが足を引きずりながらコウに近づく。

そう、夢を見た。

なんで？

なんで僕の名前を？

僕のせいって？

あの声は誰？

コウの両手は激しく震えている。

なんで？

なんで僕はあんな夢を？

分からないよ……

いやに覚えている夢の内容で、コウは感情の整理がついていないようだ。

「コウ……」

トリルが震える手に自分の手を乗せる。

「え……？」

「コウ、落ち着いて僕の声聞いて。セリムやカイはほぼ無傷。僕は少し足を打ちつけたくらい、コウはどこか痛い所は？」

「え、いや、どこも大丈夫…」

「じゃあ、深呼吸」

言われるがままにコウは二度三度深呼吸をする。

すると、不思議と気分が落ち着いた。

「もう大丈夫だね、コウ」

「あ、うん…ありがとう」

「ふう、じゃあ出発しようぜコウ？」

「さっきチリーンさんが様子を見に来たんだよ！そしたら、リীনくんがストライクに連れ去られちゃったんだって」

ずっと黙ってた二人がコウが気を失っていた間のことを話す。

塔の上から降りてきたストライクが、リীনを人質に連れ去ったのだという。

（あいつ…何て卑怯な…！！）

「じゃあ、みんな早く行こう！」

コウ達は、再び鈴鳴りの塔へと走って行った。

第25話：刺客と夢と（後書き）

コウ「短すぎるよ!？」

う、最近また前みたいに短くなりつつある気が……

今回は重要なことがちらほら見え隠れする話です。

だから、ご容赦ください！<

コウ（両手で気合いパンチ）

何その新わz

第26話…作戦

大急ぎで、塔のダンジョンの入り口に四人は着いた。

塔の中を一気に駆け上がったため、四人はそれぞれ疲れの色を見せていた。

「ふう……コウ、もうちょっとゆっくりお願い……」

「さ、さすがにしんどいぞ」

トリルとセリムは膝について息が上がっている。

「オイラはちよつと疲れたよ」

カイは少し息が乱れてるくらいであった。
もちろんコウはというと、

「みんな、これくらいじゃへこたれちゃダメだってば」

ピンピンしていた。

「そんなこと言われても……そういえばさ、確かコウ、ギルドの階段辛いって言ってなかったっけ？」

トリルはふと数日前のことを思い出していた。

「あ、そういえば……うーん、あのときはまだこの体に慣れてなかったからかな」

コウは自分の右手をじっと見つめる。

あのときは、少なくとも自分は人間であると考えていた。
もちろんそれは今も考えている。

ただ、このままポケモンのままで、リオルのコウのままで良いのでは
はと思いつつあるのである。

「ふう、もう行こうぜ。休憩は十分だろ」

セリムが立ち上がり、トリルを立たせる。

「……あ、うん」

思考の中から帰り、現実を見る。

「オイラが先頭が良いな！」

カイが元気に走り出す。



ダンジョンの中、四人は野生のポケモンの群れに囲まれていた。

「瓦割り！」

カイがコラッタに技を命中させる。

その拳は正確に相手の弱点を突き、続々と相手をノックアウトさせる。

「カイ君、急に動き良くなってるね」

トリルが足下の鉄の針を探検袋にしまいながら感心する。

「うん……カイ、格闘タイプの技の才能あるかも」

コウはさっき思い出したという、飛び膝蹴りを繰り出して見事にムツクルに命中させていた。

相性などものともせず、ムツクルは蹴られた勢いのまま、遠くに飛ばされていった。

数分後には群れは片付いていた。

「なんとか片付いたな。ほら、食べるか？」

セリムはオレンの実を上投げ、鮮やかな枝捌きのリーフブレードで4つに切り分けた。

「お、ありがとう」

「凄いね、セリム」

「いったきまうす」

コウ、トリル、カイが順番に切った実を受け取った。

「ま、次は最上階だ。歩きながら作戦を立てようぜ」

セリムがオレンの実を皮の方からかじりながら言った。

「それならね、僕、良い作戦があるよ！」

そう言うのとトリルは袋からある物を取り出した。

「これを使ってね……」

トリルが提示したその作戦には、他の三人も同意した。

よって、程なく作戦は実行されることになった。



最上階。

両開きの木の門は重々しく四人を待っていた。

「さあ、行くよみんな」

コウが全員に目を向けると、ゆっくり頷いた。

きいっと音を立てて、コウは門を押し開けた。

最上階は、数時間前にストライクが開けた風穴から森の落ち葉が入ってきていて、床が赤い絨毯になっていた。

そして最奥の、豊かの鈴の前には、犯人と人質が待っていた。

「た、助けてよ……」

目に刃を突きつけられながら、リーンはじっと堪えている。

「ふん、またお前達か…まあ、風鈴野郎にはここまで来れないか」

「お前、よくもリーンを…」

挑発的な態度のストライクに、セリムが静かに怒る。

「ストライク、リーン君を解放してくれないか？」

コウが努めて冷静に言う。

「無理だと言ったらどうだ？」

ストライクは首を横に振る。

「…………みんな、いくよ」

コウが構えをとると同時に、全員が戦闘態勢に入る。

「そうこなくっちゃなっ！」

「わわっ！」

ストライクがリーンを乱暴に後ろに投げる。

「さあ、どこからでもかかってきなよ、竜巻！」

ストライクが右手を振りかざし、竜巻を起こす。

竜巻は散っている紅葉を舞い上げて、赤くコウ達に襲いかかる。

「散らばって！」

コウが指示を出すと、四人は散開する。

「葉っぱカッター！」

セリムが走りながら葉っぱカッターを繰り出すと、どこからか緑葉を出し、ストライクにぶつかる。

緑葉は紅葉と交わり、きれいなモザイクを生み出す。

「く、居合い斬り！」

ストライクが一太刀、葉の中に斬り込む。

居合い切りの余った太刀筋が手前に居たコウに当たった。

「くう…これくらい！」

コウが倒れ込む勢いでストライクに向かい、気合いパンチを繰り出す。

拳は惜しくもかわされ、辛うじて左の肩に当たっただけだった。

「なかなかやるな…」

ストライクが小さくうめき声をあげる。

「まだまだだよ！」

カイはストライクの隙を見て背後にまわって居たのであった。

そしてカイは瓦割りのモーションを取る。

「何だと!?!」

ストライクが振り返った頃にはもう遅く、目の前に驚異的な力がこもった拳が迫っていた。

そして拳はストライクの腹に命中した。

「……………」

大ダメージを受けたであろうストライクは、顔を下げて沈黙していた。

それを見て、全員が様子をうかがう。

「倒したの?」

「いや、まだだ…」

カイの問いかけにセリムが答える。

コウはそれを横目にジッとストライクを見つめていた。

(なんだろう…………この感じ…………!?!?)

ストライクの体から、灰色の「波」が溢れ出してくるのを、コウは見た。

（また、波だ…）

「ふふふ…そうか…小賢しいわ！」

ストライクが顔をあげると、その目は赤く血走っていた。

「何だと!？」

ストライクは獣のような勢いで、動けないリーンに向かう。

「や、やめて…」

リーンは泣きそうな声で怯えていた。

「死なばもろとも！」

ストライクがギリギリ使える右手を大きく振り上げる。

「トリル、今だ！」

「うん！」

トリルが探検袋から、数本の鉄の針を上投げる。

「辻斬りいい！」

「電磁波！」

悪意の刃がリーンに襲いかかろうとした瞬間、トリルが鉄の針に電磁波をぶつけた。

すると鉄の針は、電気を運びながら光のような速さでストライクに刺さった。

「ば、馬鹿な!？」

直撃したストライクは鉄の針からの放電で、気を失った。

四人は、勝利したのである。

「なんとか作戦成功だね」

「危なかったね」

コウとトリルが胸をなで下ろす。

トリルの考えた作戦とは、単純明快に、電気を運びさせた鉄の針をぶつけて、相手をマヒさせることだった。

もちろん、その為にはまずトリル以外の三人でストライクを攪乱させて、トリルから注意を逸らすことが必要であった。

途中、予想外のこともあったが、どうにかこの作戦は成功した。



「え、本当に？」

「はい、あのストライクが塔から居なくなったのとはほぼ同時に、ダンジョンが無くなってたんです」

四人は一旦リーンを帰して、警察を呼ぶために塔を降りていた。

チリーンの話は本当で、4階以上も元の本殿となっていた。

「今回のことには父上も感謝していました。本当に、皆さんありがとうございました。ほら、リーンも」

「お兄ちゃん達ありがとー」

リーンのきらきらした笑顔がコウ達を本当に安心させた。

「じゃあチリーンさん、僕たちはもう行きますね」

「改めて、豊かの鈴を鳴らしに、屋上を目指しにな」

コウとセリムが荷袋を肩にかけて歩き出す。

「チリーンさん、また今度、研究しに来ますね！」

「じゃあねリーン！また遊ぼうね」

トリルとカイも歩き出した。



少し歩き出した頃、コウはあることを思い出した。

「ねえみんな、ストライクがリーンに辻斬りしかける前に、ストライクから灰色の『波』が出てなかった？」

「波」のことである。

「そう？僕には分からなかったよ」

「俺はじつと見てなかったけど、出てなかったと思うぜ？」

「オ、オイラも見てないよ」

どうやら誰も見てなかったようだ。

「うーん、そっか。ありがとう」

（あれは僕にしか見えてないのかな？だとしてもなんで？）

考えるほど、謎は深まる。

（僕がリオルだから？）

しかしこの感覚は、最初に「波」を感じた月の社のときから、決して初めてではない感覚であったのである。

（僕は人間だったとき、何があったのだろうか？）

その答えをくれるものは未だ無い。



「よし、鳴らすよ」

最上階、豊かの鈴の綱をトリルが握っていた。

力を込めて綱を引っ張ると、鈴は鳴った。

その鈴の音は、歴史を感じるほどに重々しく、清らかさを感じるほどに洗練されたものであった。

「良い音色…」

トリルの感嘆をよそに、全員が音色に聞き入っていた。

するとそのとき、鈴がかかっている側の部屋の壁から階段が現れた。

「これはもしかして？」

トリルは胸を弾ませている。

「うん、屋上への階段だね。これで屋上の、ホウオウ像を見に行けるよ」

コウが真っ先に階段を踏み出した。

コウに連れられてトリル達も階段を上っていった。

屋上は、思いの他足場が安定していて、四人全員が立っていられるスペースがあった。

そして、

「これが……」

「ホウオウ像……」

ホウオウ像は雄々しく塔の頂きに鎮座していた。

その様は、今にも飛び立ちそうなほどである。

「触ってみよっか」

コウが屋根から落ちないようにゆっくり像に近づいていく。

そして、台座に手を触れた。

するとどこからか、四人の耳に声が聞こえてきた。

『勇敢なる者達よ、汝らの向かわんは世界樹なり。我の力の欠片を授けん。さすればひとときに千里を駆けて彼の地に向かわん』

すると像は虹色の光を放ち、四人を包んでいった。

第26話：作戦（後書き）

お久しぶりです。

休んだ分を補うくらい気合い入れて書きました。

第27話：踊る店主

眩しい虹色の光が静まったとき、コウ達は塔の上には居なかった。

そこはまるでトレジャータウンのような、町の入り口であった。

「嘘……そんな、トレジャータウンは…」

トリルは動揺が隠せないようだ。

「ここは、トレジャータウンか？」

「違うよ。トレジャータウンは黒炎の事件の後、誰も居なくなったはずなんだ」

事情を知らないセリムにコウが説明する。

「じゃあここは一体？」

頭の中を疑問が駆けめぐる。

「とりあえず行ってみようよ。ハウオウ像はここにオイラ達を来させたわけだし」

カイの言うとおり、ここはハウオウ像が導いた場所。

ということは、ここにダークライへの手があるのだろう。

ひとまず四人は町に入ることにした。



町に入るとそこは、ますますトレジャータウンのようであった。

町を東西に渡る中央通り、その両脇には数々の屋台が出されていて、他に大型の施設も立ち並んでいた。

「凄いな…俺の記憶の中のタウンといっしょだ…」

セリムはその再現性に驚き、辺りをキョロキョロしていた。

「ねえ、あれ美味しそうだね！」

カイが屋台の一つを指差して歩き出した。

屋台の店先には果物が多く積まれていて、周りをポケモン達が囲んでいた。

「へえ、面白そう！」

カイに連れられてコウも屋台に向かい、残りの二人もついて行った。

「さあさあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃいなあ！」

「タウンの移転後、初のパッチールのフルーツパーラーでナンス！」

「新鮮な果物ナノ！」

店頭でパッチール、ソーナンス、ソーナノが声を張り上げる。

「悪夢の夜の次の日、こちらはトレジャータウンで念願のパラーを開店するつもりやったんですう」

パッチールがやや訛りのある真剣な口調になる。

「でもあの事件のせいで、こちらは路頭に迷いました」

「そうナンス！」

「でも、この町の話聞いて、こちらは命からがらここまでたどり着いたんですう」

「そうナノ？」

「そうナンス！」

合いの手にツツコミが入り、人ごみに笑いが広まる。

「それもこれも、ひとえにお客様にこちらの新鮮で最高級な果物を使った、最高級なデザートを味わって欲しいからなんですう。あの事件で大切な人を失った方々も多いやろうと思いますう。そんな時、少しでも皆さんの心を潤したく思っただんですう」

今度は人ごみにしんみりした空気が広まる。

「だから！こちらは今日、このホープタウンで、皆さんの為のフルーッパラーを開店しますう！盛り合わせ、ジュース、アイスクリーム、何でもお任せください！」

「そうナンス！」

どうやら屋台が開店したようだ。次々と人々が並んでいった。

「ねえ、今の聞いた？」

コウが振り返ってトリルを見る。

「あ、うん。パッチールさん達大変だったんだね」

「そうじゃなくて、この町の名前」

珍しくトリルと話がすれ違った。

「ホープタウンだっけか？」

間違いをセリムが訂正する。

「うん。それにあのソーナンス、『タウンの移転後』って言ったよね」

「ああ、そうだったな」

セリムが話の内容を思い出す。

「ここにギルドもあるかもしれないんじゃないかっていうこと？」

あの日、こっそりギルドを抜け出してから、心配で今までトリルは一度もギルドのことを忘れたことはなかった。

ただし、「逃げたらお仕置き！」というギルドの約束もあつてのとだが。

「じゃあさ、パッチールさんに話を聞こうよ」

カイが行列に並び、その後ろに三人も並んだ。

十数分後：

「はい、いらっしやいませ、兄さん方。ご注文は何になさいますう？」

「えっとね、ナナの実の」

「すみません、ギルドってどこにあるか知ってますか？」

カイの注文を、セリムが遮断した。

「ギルド？それならこの道をずっと行った突き当たりにありますよ。何かご用で？」

パッチールがナナの実を手取る。

「僕達、トレジャータウンのときのギルドのメンバーだったんです。あの日、依頼を受けていて、帰ってきたときにはギルドが、タウンが無くて…」

トリルが泣きそうな声で説明する。

「まあまあ…兄さん方も大変だったんですねえ…よし、うちが兄さ

ん達についていったる！ソーナンス、今日は任したよお！」

そう言って、パッチールはさっそうと店外に躍り出た。

「そ、ソンナ！」

「がんばるノ！」

店番のソーナンスとソーナノは言われた瞬間は驚いていたが、すぐに納得したようだった。

「さ、行きましょ。うちはパッチ。天下一のフルーツパーラーを目指す商人ですう」

パッチールは、くるりと踊った。

「パッチさん、面白い人だね」

「うちの家は代々踊り子をやってたんですう。おかげで踊りは得意なんですう」

カイはしげしげとパッチを見る。

「じゃあ、なんで果物屋なんかやってるんだ？」

パッチが振り返ってセリムを見る。

「果物屋じゃないですう！うちは『フルーツパーラー』ですう！うちは果物を売ったり、果物を使った料理を出す喫茶店なんですう！」

パッチが跳ねながら怒る。

「パッチさん、果物はどこから取ってるんですか？」

コウがどうにか話を逸らそうとする。

「よくぞ聞いてくれました兄さん！まず定番のオレンの実は木の実の森の中の一つの木に限って採取して…」

しまった、話が長い人だ。

コウはセリムのフォローをしたことを少し後悔していた。
ちらりとセリムを見ると、ごめんと手を合わせて、申し訳無さそうにコウを見ていた。



「さあ、ここがギルドの入り口ですう」

しばらくして、ようやく目的地に着いた。

「こ、ここが？」

聞き疲れているコウの目前には、

「テント？」

トリルも首をかしげる。

それはただのテント。

しかもだいたい使い古した感じがするテントがあった。

「はい。では、うちの役目はここまでですう。今度また、うちのフルーツパーラーをよろしくお願いしますう」

そうして、パッチは去ってしまった。

「じゃあ、行こっか」

コウが、ふうと息をつく。

テントの布をくぐると、そこには地下に向かうハシゴがあった。

「ハシゴ？」

「前と一緒にだね」

トリルがコウを見る。

「だね。やっぱりここはギルドの入り口みたいだ」

コウから順番に、四人はハシゴを降りていった。

第27話：踊る店主（後書き）

お久しぶりです。

短いですがO R Z

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4678r/>

ポケモン不思議のダンジョン 一波紋の勇者―

2011年10月8日20時52分発行